研　究　紀　要

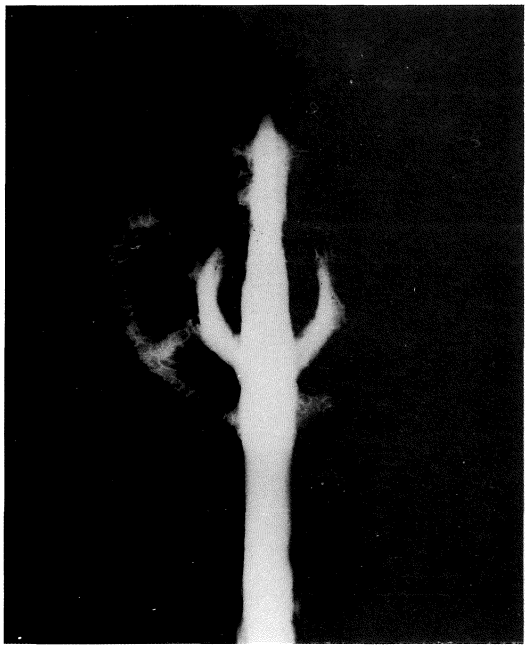
第 8 号

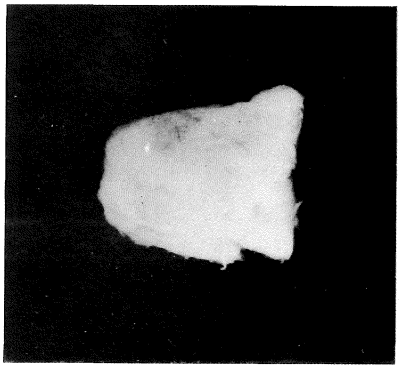
1 9 9 1

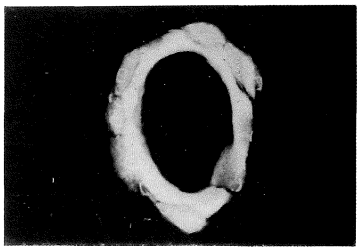
財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

巻頭図版

（瀧瀬論文付図）







熊谷市三ヶ尻林４号墳出土銀象嵌装大刀

上　出土状況　　下　Ｘ線写真（左 鐔　右上 鞘尻金具　右下 柄頭縁金具）

目　　次

序

方形周溝墓観察の一視点（１）
大屋　道則……1

溝中土壙小考
福田　　聖……9

関東地方東部における古墳出現期の様相Ⅰ
（古墳出現前夜の様相）　村田　健二……37

関東地方における埴輪祭式の受容
山本　　靖……65

埼玉県の拵付大刀
瀧瀬　芳之……101

「鬼高式土器」の外部
―古墳時代後期福島県域土器群と北部関東土器群の比較検討―
利根川章彦……127

古代武蔵の土師器理解のために
―北武蔵の７・８世紀の様相―　赤熊　浩一……165

「鬼高式土器」の外部

― 古墳時代後期福島県域土器群と北部関東土器群の比較検討 ―

利根川　章彦

1．はじめに

古墳時代の集落遺跡・集落遺跡群の様相・変遷を考えるにあたって、土師器の編年と地域性を細かく分析し、住居・集落の同時性・地域的偏在性、偶発的あるいは必然的な移動・移住・編成などを推定することによって家族集団の構成・地域史的総括に迫ることができる。これが土器研究から社会構造の復原に至る最もオーソドックスな方法と考えられてきたと思う。

現在では、土師器研究はもとより古墳時代の集落研究も停滞気味であるが、各地域における土器編年細分案の提示が限界に達していること、黒井峯遺跡・中筋遺跡のように火山灰に特定時期をパッキングされた遺跡において通常の発掘調査では検出不能の遺構が検出されたり、同時期の住居群に厳密な方位の規制が認められなかったりしたことなどによって、従来の研究法の有効性に疑問符が付きだしたことが一因であると思う。遺構の問題はひとまず置くとして、土師器編年細分論から直接的に導かれるのは各地域における土器製作の「流儀」であり、土器生産から流通・消費までの各小集団の経済的な関係性にほかならないが、移動論を含めた大きな人間集団の動態を考えるためには土器の「地域性」を正確かつ詳細に知る必要がある。

筆者もかつて埼玉県児玉郡地方の和泉式後半から国分式初期の土器編年細分を試み、それを基礎に５～８世紀の集落遺跡群の地域的動態を考察し、群集墳形成期と国郡里制成立期に集落遺跡群の編成の変化の大きな画期があることを指摘したことがある（註１）。土器変遷の枠組みは現状ではもう既に有効でない部分があるため今後大幅な修正を必要とするが、本稿の目的に適合しないので機会を改めて再考してみたい。ただし、社会構造の復原を前提に検討する場合、この方法以外に遺構そのものの型式分類や遺物の出土のしかたにおける特徴、土器編年同時期の住居相互の位置取り・重複から考えられる「住まいの流れ」（註２）など遺跡論・遺構論的検討が必要であることは言うまでもない。しかし、この中で指摘しておいた児玉郡内の土器の「地域性」はまだ有効であり、さらに正確な把握が必要になっていると思う。

本稿の目的は、筆者が主として検討してきた埼玉県北部の５～６世紀の土師器に関して東日本全体の中でどのような位置付けができるかを考え、いわゆる「鬼高式土器」の歴史的世界、律令国家成立以前の辺境の問題を考えるための基礎作りをすることである。当面の対象として福島県域の同時期の土器群との比較検討を選んだ理由は、この地方が「鬼高式土器」の分布域の北側に接触しており、その土器群が「鬼高式土器」の北限の土器群とどのような交渉を持っているかを明らかにしておく必要性を感じたという取るに足らないものであったが、将来的には氏家和典氏の仙台湾を中心とした土師器編年や東北地方各地の土師器研究と関東地方各地の土師器研究の比較検討に進みたい。

次章以下の本論においては、5世紀後半～6世紀代に属する福島県内のいくつかの遺跡の土器の観察結果と派生する二、三の問題を述べ、北関東の土器群との若干の比較検討を試みたい。

2．古墳時代後期土師器の地域性認識の研究動向について

実際の資料の検討を始める前に、「鬼高式土器」周辺の土器の地域性の研究の推移に触れておこう。1970年代までの土師器研究一般には地域性の認識は希薄であった。基準資料の偏在性にもよるが、この時期までは「編年体系確立の時代」と言える。この時期の鬼高式土器編年論の代表的なものとしては、戦前の山内清男・奥田直栄両氏らの古墳時代土器二大別法を主眼とした研究(註3)、「原史学」の確立をめざしてその時間軸としての弥生土器・土師器の体系的総括を試みた杉原荘介の「鬼高式」認識（註4）、桜井清彦・玉口時雄・小出義治氏らの実体的編年論を通じた鬼高式二細別論（註5）、八王子市中田遺跡の調査成果から析出してきた岡田淳子・服部敬史両氏らの鬼高式三細別案（註6）などがある。

1970年代以降、土地開発の大型化と文化財保護法の整備によって集落遺跡の発掘調査が大規模化し、遺跡の破壊と引き替えに良好な古墳時代の土師器の資料が蓄積されていった。鬼高式土器に限ったとしても、千葉県千葉市上ノ台遺跡・有吉遺跡、東京都八王子市船田遺跡、埼玉県本庄市後張遺跡などに代表される住居跡総数200軒を越える集落遺跡のような少人数の研究者では細かな分析が困難な程の大量の土師器群が出土するに至り、さらに激増する傾向が現在も続いている。

かかる状況の中で、各県の研究者が土師器編年の細分案の作成に乗り出し、100年を四分割する25年程度のオーダーを目安に編年細分論を提示した。いちいち論及しないが、このような研究は平城宮跡・藤原宮跡出土土師器を細分した吉田恵二氏（註7）・西弘海氏（註8）らの業績や田辺昭三氏（註9）・中村浩氏（註10）らの大阪府陶邑古窯址群から導き出された古墳時代須恵器の細分様式（窯式あるいは段階細分）に刺激されて、土師器型式概念による編年から暦年代提示型編年に進むという共通した特徴がある。この結果、各地の土師器の細分案は見かけ上比較しやすくなったはずであるが、本来年代比定を依拠していたはずの須恵器が地方窯製品のため陶邑編年が通用しなかったり、近隣地域の編年案と対比する努力を怠っていたりしたため、実際には細分案同士の対比は簡単ではない状況にある。この点に関しては筆者も例外でなく、自戒の念を禁じえない。

しかしながら、隣接地域の土器の搬入や模倣に着目して編年上の対比を志向する研究や、特定器種の広域的分布を確認しながら土器の地域色を析出させようとする研究も見受けられる。古くは、岩崎卓也氏の鬼高式土器総論の中に盛り込まれた地域色発現とその背景への論及（註11）や玉口時雄氏の全国編年案（註12)、杉原荘介氏を中心とした土師器の集成と解説（註13）等があるわけであるが、信州（善光寺平・伊那谷)・北関東・南関東を具体的に対比し、その時間差の介在まで論じた岩崎氏の研究は、弥生時代以来の地域性・古墳築造状況と土器群の領域の比較、さらに地域史的総括など現在の研究においても参照すべき点が少なくない。この他にいわゆる「比企型坏」を特定生産集団と結び付け、武蔵地域を中心に分布し、「仲買人」のような媒介者を集落の中に想定しようとする服部敬史氏の小論（註14）も無視できない。

近年、共同研究によって古墳時代後期の土器の地域色に迫ろうとするものが目立つが、それには

杉山晋作・上野純司・村山好文・金丸誠・石倉亮治各氏らを中心とした房総地域の研究（註15)、東北北部から信州・北陸・東海までの東日本各地の黒色土器出現期を追求した東国土器研究会の業績（註16)、福島県各地域の５～７世紀の土師器の比較検討を中心に東北各地・北関東東部にも論及しようとした鹿島町の「万葉の里シンポジウム」（註17）などを指摘することができる。これらはごく最近の編年再編成志向として考えることができるが、細部にわたった比較は必ずしも十分とはいえない部分が多い。

個人によるものもさほど多いといえず、南関東の坏形土器の詳細な比較検討を中心とした長谷川厚氏の研究（註18)、大型甑形土器を関東・東海・信州などの各地域について比較した中村倉司氏の研究（註19)、長胴甕の地域差を関東各地域で比較した村山好文氏の研究（註20)、「善光寺平型坏」に関する田口一郎氏（註21)・「比企型坏」に関する水口由紀子氏（註22)・北関東西部地域の坏形土器の小地域の地域性を明らかにした田中広明氏（註23）などの坏形土器研究が目立つ程度である。これらにおいても、土器の観察や他地域の土器との比較は詳細を極めるが、時間軸上の土器の変化と地域色の現われ方についての法則的認識はまだやや難点のある部分があり、まだ研究途上という状況で把握しておいた方がよいのかもしれない。ただし、中村論文における、竈・須恵器・大型甑の出現に関する「毛野王権」と西国・朝鮮との（畿内王権を介在しない）直接的交渉の可能性の示唆、田中論文における埼玉古墳群被葬者層の共同体成員に対する徭役労働差発権と地域的土器群の領域の様相の関係性および在地首長層による生産・再配分の構造化の指摘は今後十分考慮していかねばならない重要課題である。

いずれにしても、かつて岩崎氏が示唆した鬼高式土器を中心とした土師器の編年・地域性を基礎とした地域史的把握を方法レベルで止揚し、新たな土師器論および土器生産・流通・消費に関する地域史論を構築する段階まで行っておらず、本稿で示す試論もやはりその域に到達しえないが、本章で触れた研究動向を踏まえ、今後の議論の基礎とすべく、次章以下に具体的な土器群の検討とそこから析出する地域性に関する二・三の問題を論じてみたい。

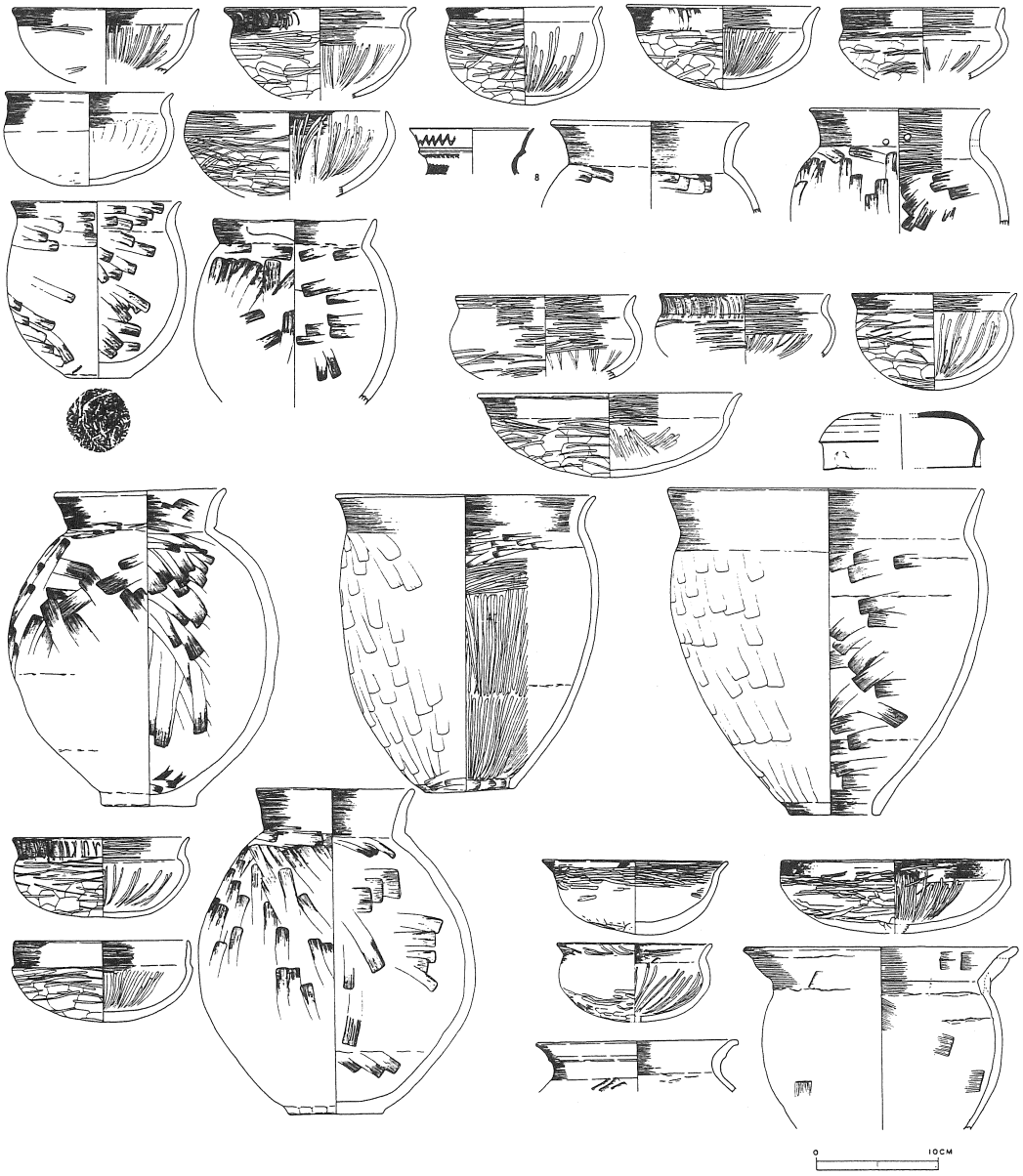
３．福島県域の古墳時代後期土師器の様相

福島県においても近年の大規模発掘調査によって蓄積された古墳時代後期の土師器群はかなり多くなってきており、郡山市のように独自の編年ができるほどに資料的に整ってきた地域もある。本章ではこれらのうち県南地域（母畑地区など・いわき市域)・県央地域（郡山市域)・県北地域（相双地域）などに分けて、良好な遺跡の資料のいくつかを取り上げておきたい。

(1) 県南地域

ここでは中通り地方南部の国営総合農地開発事業母畑地区の遺跡群を中心に述べ、いわき市域については節を改めて述べたい。

国営総合農地開発事業母畑地区は阿武隈川上流域右岸沿いの６市町村、4,379haの丘陵地帯を対象としており、このうち県南部に属する西白河郡東村大字上野出島地内の矢武川北岸の丘陵地帯には西原遺跡・板倉前Ｂ遺跡・佐平林遺跡・谷地前Ｃ遺跡・赤根久保遺跡などの５～９世紀の集落遺跡群、７～８世紀に築造された笊内古墳群などの古墳群が知られ、東西に長い低丘陵上に川を臨む



第１図　福島県南地域の古墳時代後期土師器(1)〔南小泉式（新）段階〕
（上：板倉前Ｂ遺跡２号住，中：同３号住，下左：同５号住，下右：西原遺跡２号住）

ように分布している。

このうち板倉前Ｂ・西原の２遺跡には５世紀後半期、佐平林遺跡には６世紀前半期にあたる土師器の良好な一括資料が含まれている。特に坏・埦類を中心にその特徴が考えられている。すなわち丸底で口縁部が小さく外反し、内面に鋭い稜線を持つ埦（内斜口縁坏）（註24）を多く含む「南小泉式」後半・「引田式」併行期の板倉前Ｂ・西原、ややバリエーションが多い坏類を持つが、その主体が口縁部がやや大きく外反する「有稜坏」（須恵器蓋坏模倣坏）（註25）と「内斜口縁坏」のスタイルが形骸化した口縁部が大きく外反し、内外面にほとんど稜線を伴うことのない「伝統的在

地型坏」を主体とする佐平林という特徴がある。佐平林の資料からは、仙台湾編年の「住社式」併行期として「佐平林式」が提唱されている（註26）。

まず、板倉前Ｂ遺跡２号住居跡から見ておこう（第１図上段）（註27）。坏・埦類は内斜口縁の系統のもの（坏Ａ）と口縁部が内湾する平底椀（坏Ｂ）の二者がある。前者（坏Ａ）はきっちり「く」の字に折れるもの、小さく外反するもの、大きく外反するものに分かれ、内面の稜線が明瞭なものと不明瞭なものがある。後者（坏Ｂ）は口径がやや大きく、体部と口縁部の境目で内側にゆるく折り曲げるように作られる。ミガキはほとんどの個体に施され、関東の土器に比較するとはるかに入念に仕上げの工程を踏んでいる。坏Ａ・Ｂともに体部内面に正放射状、口縁部内外面に横位の密なミガキが施されている。口縁部のミガキは強めのヨコナデ痕を消している。体部外面のヘラケズリが細かく、ケズリ後ナデ→ミガキに進んでいる。口縁部外面に最終段階の調整としてタテ方向のミガキを等間隔に施すものがあるが、新しい段階の資料にはこの技法がやや普遍化する傾向がある。

甕は中・小型のものしか共伴していない。口縁部が長くゆるく外反して立つ丸胴の甕（小型甕Ａ、第１・２図）と短い口縁部で「く」の字かそのやや崩れな形態で胴はあまり張り出さないもの（小型甕Ｂ、第１図上段のみ）がある。内外面ともよくナデられている。

なお、この住居跡にはＴＫ208型式かそれよりやや新しい段階の須恵器瑳の口縁部破片が伴っている。カマドの付設など新しい要素の目立つ住居跡であるが、５世紀後半から終末にあたるものであろう。

２号住居跡より若干新しいと思われる３号住居跡（第１図中段）の坏・埦類は坏Ａのみ４点であり、大型甑２点と大型甕１点、須恵器坏蓋１点を共伴する。坏Ａは内面の稜がはっきりしないものが増加し、口縁部の屈曲もゆるくなっている。口縁部外面のタテミガキも工具の往復によって施す手法に変わっている。口径の大きな１点は一見須恵器模倣坏の口縁部が外反する形態のものに近いが、口縁部の作りや調整の特徴から２号住居跡の後続形態と考えておきたい。

大型甑は口縁部が長めで、無底形で砲弾形胴部を呈する。内外面ともよくナデられ、ミガキを伴うものもある。大型甕はやや厚い器壁を持ち、「く」の字状口縁、丸いが長胴化傾向の胴部、平底を呈するものである。内外面ともよくナデられている。須恵器坏蓋は歪みが大きいが、口唇部に沈線を有するものでＭＴ15型式かそれ以前に併行するものであろう。

また、５号住居跡にも３号住居跡とほぼ同時期と思われる一群がある（第１図下段左）。ここには口縁部が直立する形態の須恵器模倣坏（坏Ｃ）がある。坏Ｃは口唇部を尖り気味に作り、口縁部と体部の境目に沈線を引くようにして稜を作るもので、口縁部に対して体部・底部は深めになっている。坏Ａは口縁部の外反度の大きいもので、２号住居跡より器高が低くなり、口縁部外面のタテミガキも往復手法である。大型甕は３号住居跡のものと同様な様相のものである。

次に西原遺跡（註28）を見るが、ここでは１・２・７号住居跡に「南小泉式」後半・「引田式」併行期の土器群がある。１号住居跡（第２図上段左）には坏Ａ・深身の埦・坩・小型甕がある。坏Ａは口縁部内面の稜が明瞭なものが多く、板倉前Ｂ遺跡２号住居跡の様相に近いが、外反度の大きい口縁部外面タテミガキの一群はない。埦は器壁が薄く、底面に凹部を持つことなど、大型坩の作りかけを埦に作り替えたような丸い器形を呈するものである。坩は胴部に対して口縁部が短いもので、丸底・ややつ

第２図　福島県南地域の古墳時代後期土師器(2)〔南小泉式（新）段階〕
（上左：西原遺跡１号住，右および下：同７号住）

ぶれた球形胴・外反する口縁部という特徴がある。坏・埦類がミガキ多用なのに対してこの坩は丁寧なナデが施されるのみである。小型甕は胴部上位・口縁部を欠いているが、長胴化傾向の丸胴・平底であり、胴部内面と外面上半部はよくナデられるが、外面下半部はヘラケズリのみの調整である。

２号住居跡（第１図下段右）には坏Ａ・坏Ｃ・小型甕・大型甕がある。坏Ａは口縁部内面の稜が不明瞭なもの２個体である。口唇部の作りがややゆるくなっており、１号住居跡より後出的である。坏Ｃは稜線が曖昧な大振りの坏で器高が低い。この範疇に含めるのを躊躇するような形態であるが、関東地方の須恵器模倣坏よりも「住社式」の坏の系統の一部と考えた方がよいかもしれない。小井川和夫氏の言う「関東系土器」（註29）の中に含まれるような坏の形態に近いものがあることも注意を要する。小型甕は口縁部外面に段あるもの、口縁部が分厚くボッテリと作られるものがある。前者はヨコナデが強めで、頸部の屈曲がややゆるい。後者はヨコナデが弱めで、口縁部～胴部上位に指頭圧痕や粘土帯接合痕が目立つ。双方とも丸い胴を持つようである。大型甕は長胴化傾向の丸い胴を持ち、底部は輪台状の作りになる平底であり、内外面がよくナデられる。内面には粘土帯接合痕があり、ゆるいミガキも認められる。

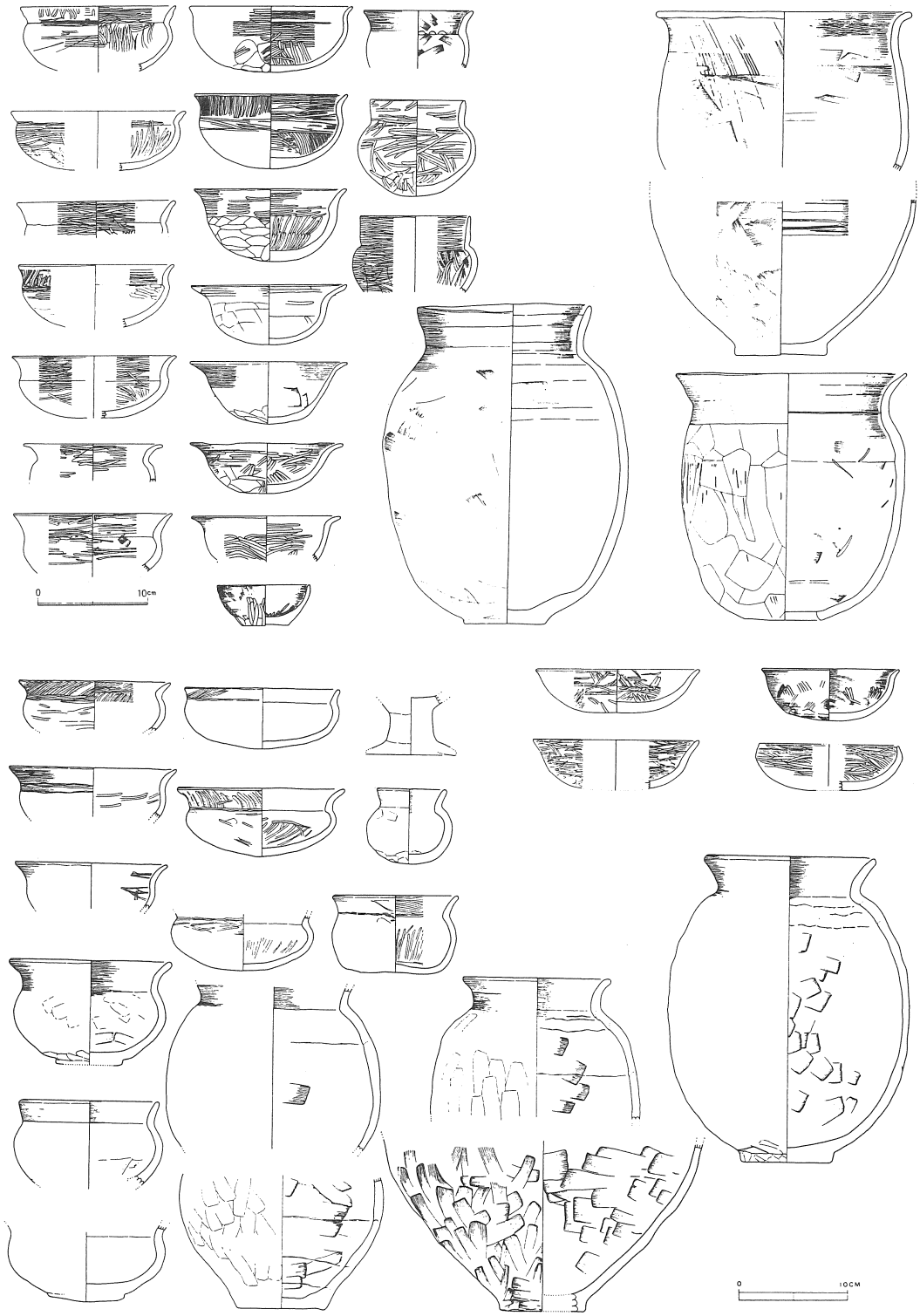
７号住居跡（第２図下段および右側）には坏Ａ・坏Ｂ・坏Ｃ・坩・小型甕・大型甕・大型甑がある。坏Ａは、底面を欠くが丸底と思われるものと平底のものがあり、報告書に図示されていないが、前者に近いものがもう２点ある。前者は分厚い器壁で、口縁部の屈曲やや弱く口唇部は尖る。内外面のナデは丁寧であり、ミガキはやや疎に施されるが、平滑で光沢が少しある。後者は報告された実

測図とやや異なり、口唇部は尖り気味である。口縁部・体部上端の内外面はミガかれているが、それ以下はナデである。底面はケズリ→ナデで整えられた小さな平底である。坏Bは、小さな底部を持ち、外傾する体部がより特徴的であり、口縁部の内湾度の弱い器形である。前者は上げ底状のやや深い凹部を持つ底部で口唇部は尖り気味、ナデ調整が主でミガキはまばらである。後者はわずかに上げ底状で前者より大きめの平底である。やはり口唇部は尖り気味で、内外面のミガキは密である。坏Cは2号住居跡と同様、本来的な須恵器模倣坏でなく、体部と口縁部の境目を屈曲させ、そこに内外面ともやや緩い稜を有する形態である。大振りで、口縁部に対して体部・底部が深い。体部・底部の外面は細かいケズリ→まばらなミガキ、内面は密な正放射状ミガキである。坩は中型になったもので、分厚い器壁・短い頸部・外側に面を作って尖った口唇部が特徴的である。口縁部・頸部の内外面にはタテ方向のミガキ、口唇部と胴部の外面はヨコ方向のミガキ、胴部内面はナデが施され、胴部内面には粘土紐マキアゲ痕が目立つ。小型甕は、小型で器壁の厚い、荒い調整のものと中型で丁寧な作りのものがある。前者は口縁部が直立気味で、頸部の屈曲は小さい。胴部はやや丸く、外面はザックリした面取り状のケズリが施され、内面は強めのナデである。平底の底面は抉り取るようなケズリで作られる。底部は分厚い。後者は長い口縁部が上半で強く外反するもので、頸部の屈曲も強めであり、やや間延びした丸胴でケズリで整えられた平底を有する。ヨコナデは口縁部に限定されず胴部上端に達しており、胴部内外面は丁寧なナデである。胴部上位の内面には粘土帯接合痕が2条ある。胴部外面全体がスス付着のため黒い。大型甕は胴下半部を欠くがかなり大きく胴の張る器形で器壁も厚い。頸部の屈曲も強い。胴部上端外面にヨコナデ状のナデが施され、この部分にはヘラ痕も顕著である。内外面は丁寧にナデられている。大型甑は長胴甕の底部を筒抜けのようにした無底形の形態で頸部の屈曲がやや強い。頸部には穿孔されているが、一対の可能性もある。胴部内外面はよくナデられているが、胴上半部外面はかなり丁寧で、ヨコナデ風である。

西原遺跡の資料は坏A・坏Cの様相から1・7号住居跡→2号住居跡という変遷で考えることができそうである。前者は5世紀後半～末葉、後者は6世紀初頭前後であろう。つまり、板倉前B遺跡の2号住居跡→3・5号住居跡にほぼ併行させて考えることができる。

続いて佐平林遺跡を見ておこう（註30)。佐平林遺跡は総面積約80,000m²に達する大きな遺跡で、全体の1割程度が調査されている。調査報告書の刊行順にⅠ～Ⅳ区、Ⅴ区、Ⅵ区、Ⅶ区、Ⅷ区に分割されている。Ⅰ～Ⅳ区は14号住居跡が「南小泉式」後半・「引田式」併行期、1・3・4・5・6・8号住居跡の6軒の住居跡と22号土壙が「住社式」併行の「佐平林式」・「舞台式」、7・16号住居跡が「栗囲式」に属する。Ⅵ区は4号土壙が「佐平林式」、Ⅶ区は3・7・11・18・21号住居跡、1号土壙、E－6グリッド一括が「佐平林式」・「舞台式」にあたる。これらの資料のうち、「佐平林式」・「舞台式」に該当するものを取り上げたい。

まずⅠ～Ⅳ区4号住居跡(第3図上段)であるが、ここでは坏Aはごくわずかしかなく、その変形したものと考えられる、口縁部が強く外反し体部と口縁部の境に明瞭な稜を持たない丸底の坏（坏Dとする）と、坏Cの系統にあるものだとは思うが、口縁部が外湾して立ち口唇部が外反するもの（坏Eとする）が主体となる。坏Dには外形上坏Eとの区別が明確でないものもある。口縁部と体部の境の内外面あるいは内面・外面のどちらかに明瞭な稜のあるものを坏Eとしておこう。4号住



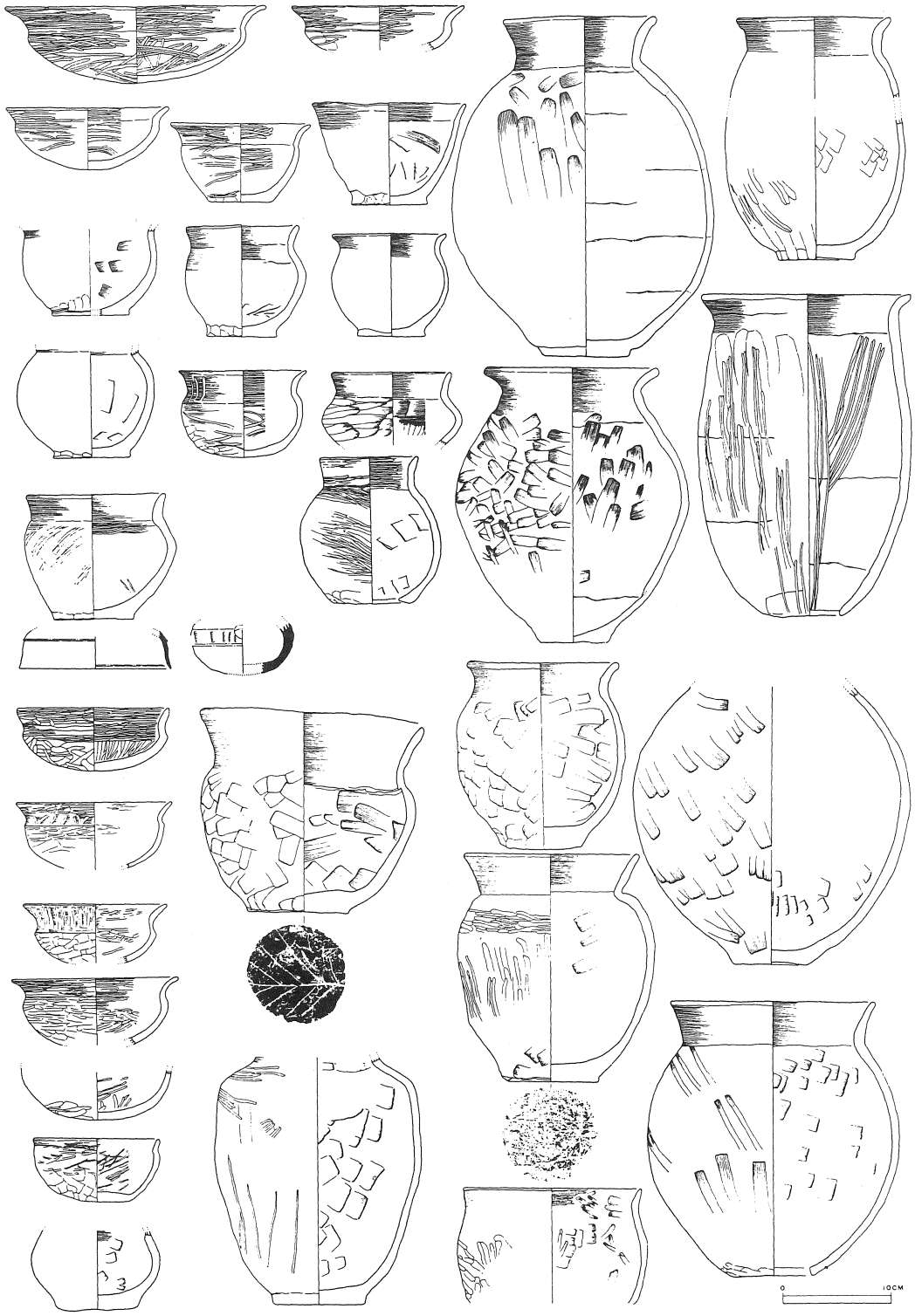
第３図　福島県南地域の古墳時代後期土師器(3)〔佐平林式（古）段階〕
（上：佐平林遺跡Ⅰ～Ⅳ区４号住，下：同Ⅷ区３号住，ただし中段右寄りの坏は，左：Ⅰ～Ⅳ区１号住，右：同３号住）

居跡では供膳器の内訳は坏Ａ３点、坏Ｄ６点、坏Ｅ４点、その他２点となっている。坏Ａは体部が浅く、口径が若干大きくなっているが、体部内面放射状ミガキ、口縁部内外面・体部外面ヨコミガキは前段階と同様である。坏Ｄは体部から口縁部・口唇部まで緩やかな「Ｓ」の字を描いて移行し、やや深めの丸底になっている。ただし、より坏Ａに近似しており、口縁部と体部の境に稜を持てば坏Ｅと区別のつかなくなるものと口唇部の外反度が強く、体部の径と口径の差が大きいものに分けて考えられる。坏Ｅは稜の意識はあまり強くない作りであるが、調整技法上も器形上も口縁部と体部の区別が明確である。なお、内外面の調整は坏Ｄ・坏Ｅともにミガキが卓越するが、坏Ｄにミガキを省略する傾向がある。口縁部外面にタテミガキを施すものも少数であるが双方ともにある。また坏Ｄのうちの１点には内面が黒色処理されている。大型甕は前段階以来の長胴化したもの（甕Ａとする）と胴部の張り出しが弱く口径の大きな変則的形態のもの（甕Ｂとする）の二形態がある。甕Ａは頸部で「く」の字に屈曲し、やや長めの口縁部がゆるく外反して立ち上がる。胴部は前段階より長胴化が著しいが、やや丸い胴部を呈するものもある。底部は平底で、木葉痕を持つものもある。内外面とも丁寧なナデで仕上げられ、口縁部のヨコナデが胴部上端に及ぶものもある。甕Ｂは胴下半部を欠くが、類品が34号土壙出土品中にあり、類推可能である。口縁部は上位で強く外反し、口径と胴径はほぼ等しい。頸部もほとんど屈曲せずに胴部に移行し、下半部で胴がつぼまる「ずん胴」に近い形態となる。底部は平底である。器高も甕Ａほど高くない。甕Ａと同様丁寧なナデで仕上げられる。ヨコナデは内外面ないし内面において胴上端部まで施される。坩も若干量出土しているが、口縁部が短く直立気味となり、「南小泉式」段階の器形よりも矮小化している。大型甑は無底形であるが、胴部下端のつぼまり方が顕著であるため、孔の径はやや小さめである。頸部でゆるく屈曲し、口縁部は外反するので、甕の形態の甑である。前段階の大型甑からの系譜がたどれる器形ではない。これよりやや新しい段階もそうであるが、「佐平林式」においては甕形態で副次的に製作される甑が多いようである。

なお、この住居跡と様相の近いものに１・３号住居跡およびⅧ区３号住居跡など（第３図下段）があるが、３号住居跡には口縁部を内屈させる形態の小振りの坏Ｂがあり、１号住居跡の坏Ｄは体部から口縁部の立ち上がりがゆるく外傾する形態のものを含む。また、「南小泉式」後半・「引田式」併行期と考えられる14号住居跡に、報告書に図示されていないが、須恵器模倣度の顕著な坏Ｃが伴出している。これらを状況証拠として把握していくならば、「佐平林式」の（古）段階は６世紀前半代でも５世紀に接する時期までは上がらない時期とすることができよう。

Ⅰ～Ⅳ区４号住居跡に後続する段階はⅠ～Ⅳ区６・８号住居跡、Ⅷ区７・11・18・21号住居跡などをあげることができよう。この段階は後述する舞台遺跡の土器群に近似しており、「佐平林式」（新）段階の一部と「舞台式」が年代的に重複する部分をもつことが想定できるかもしれない。Ⅷ区７・21号住居跡（第４図）を中心に述べることにする。

坏・埦類は坏Ｅが中心となる。口縁部の外反度が大きくなり、口縁部中位で屈曲するような作りを持つものもある。坏Ｄもあるが、器形・調整手法の特徴は坏Ｅとほとんど変わらない。また、７号住居跡・Ⅰ～Ⅳ区６号住居跡には口径のかなり大きな坏Ｅが出土している。11号住居跡では坏Ｅに形態の類似する坏Ｄ、21号住居跡には作りの緩い坏Ａもあるが、坏Ｅの影響で変形している。Ⅰ



第４図　福島県南地域の古墳時代後期土師器(4)〔佐平林式（新）段階〕
（上：佐平林遺跡Ⅷ区７号住，下：同21号住）

～Ⅳ区８号住居跡には口縁部が外傾する坏Ｃがあるが、これは体部・底部の器壁が厚く、口縁部・体部外面の境目の稜は浅い沈線状に作られる。口縁部のヨコナデは工具を数ヶ所で静止する技法をとっており、体部・底部の内外面は入念にミガかれている。細部の相違点を捨象すれば、関東地方の鬼高式土器のうち６世紀後半段階に盛行するタイプの須恵器模倣坏に近い。

甕は大型甕・小型甕があるが、小物入れ的な小型甕が増加している。小型甕はバリエーションが多いが、概して口縁部が短く、直立するもの・外反するもの・外傾するものに分かれる。胴部の張りは弱く、丸い胴か、下半部がつぼまる器形になるものでケズリで整えた平底である。大型甕は器形・調整とも前時期のものとほとんど変わらず、間延びした丸い胴（長胴化傾向）・やや長めで外反する口縁・木葉痕ないしヘラケズリ調整の平底・胴部上端に達する口縁部のヨコナデ・胴部内外面の丁寧なナデを特徴とする。Ⅰ～Ⅳ区８号住居跡には小型甕の器形でありながら器面全体を丁寧にミガいているものもある。

大型甑もバリエーションが多く、やはり前時期と同じように大型甕の底部を筒抜けにした無底形であり、口縁部はヨコナデ、胴部は丁寧なナデを施す。ただし、７号住居跡の大型甑は胴部の張らない甑特有の器形であり、胴部内外面にやや密なタテミガキを施すものである。

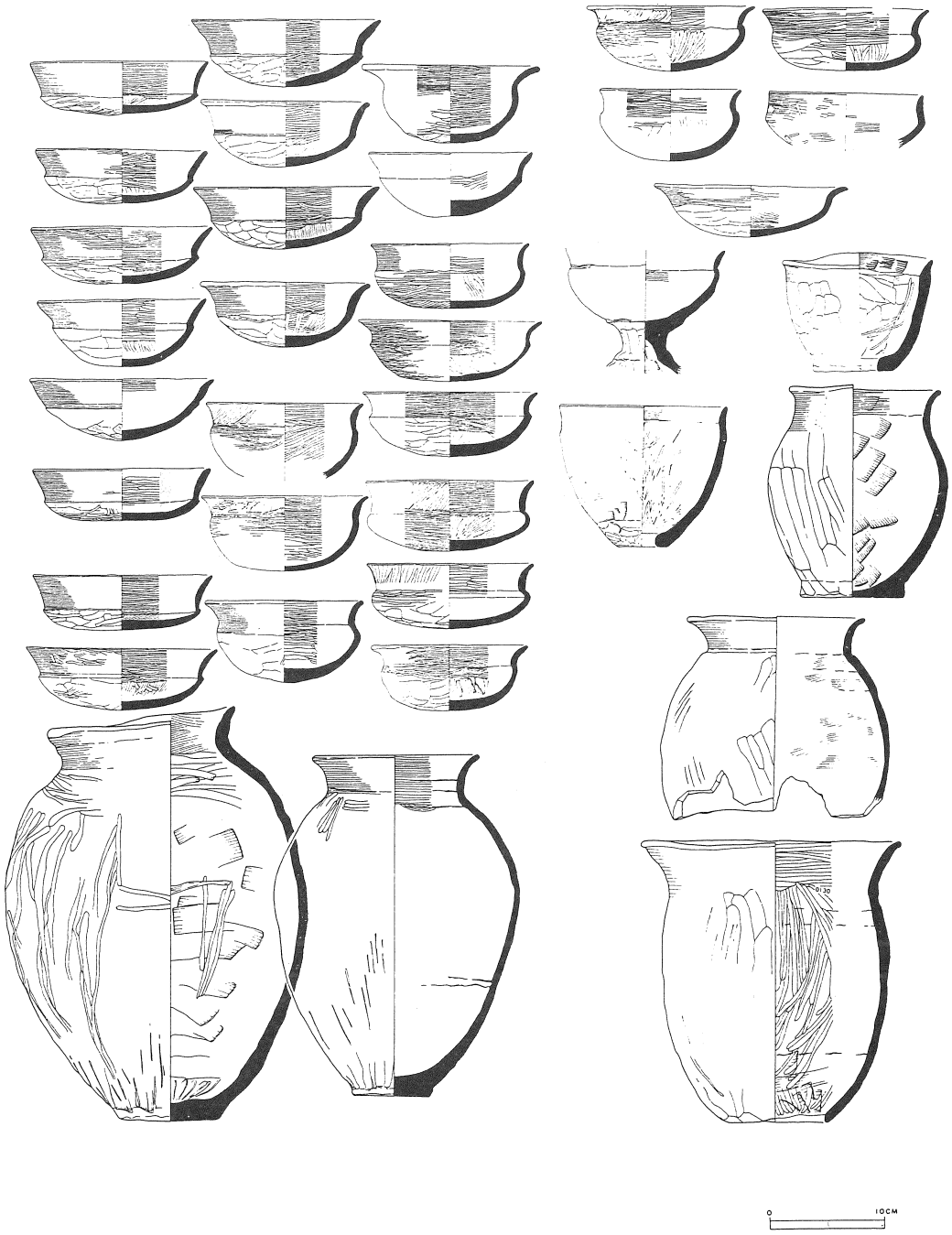
数少ないが鉢もある。胴下半部は大きく外に開き、胴部上位から頸部にかけて短く直立し、口縁部は小さく外反する。胴部外面は面取り状のケズリの後ナデ、内面は丁寧なヨコミガキ、口縁部はヨコナデである。

須恵器の共伴も数少ない。７号住居跡に立ち上がり部が「ハ」の字状に開く坏蓋と胴部の小さな瑳の破片が確認されているにすぎない。これらは古くみても６世紀中葉以前に遡ることはなく、おそらく６世紀後葉でも新しい段階になるものと思われる。これはこの段階の年代を指示する根拠にできるかもしれない。

この項の最後に舞台遺跡の「舞台式」について触れておこう。舞台遺跡は別項で取り上げる郡山市域の大根畑遺跡・東丸山遺跡に比較的近い位置にあり、本来県央地域として扱うべきかもしれないが、県域全体では南寄りであり、佐平林遺跡の「佐平林式」と同様に標式的資料でもあるのでこの項で述べておくことにする。

舞台遺跡（註31）は郡山市の南西にある岩瀬郡天栄村に所在し、阿武隈川の一小支流である広戸川の北岸の微高地に占地している。検出された14軒の住居跡のうち、１・２・５・９・11・12・13号住居跡の７軒から古墳時代後期の良好な土師器のセットが得られている。これらはおおよそ６世紀後半に属すると見てよいものである。坏・高坏・鉢・大型甕・小型甕・大型甑・小型甑・坩など多くの器種を揃えており、器種の欠落の多い母畑地区の「佐平林式」の一群と対照的である（第５・６図）。

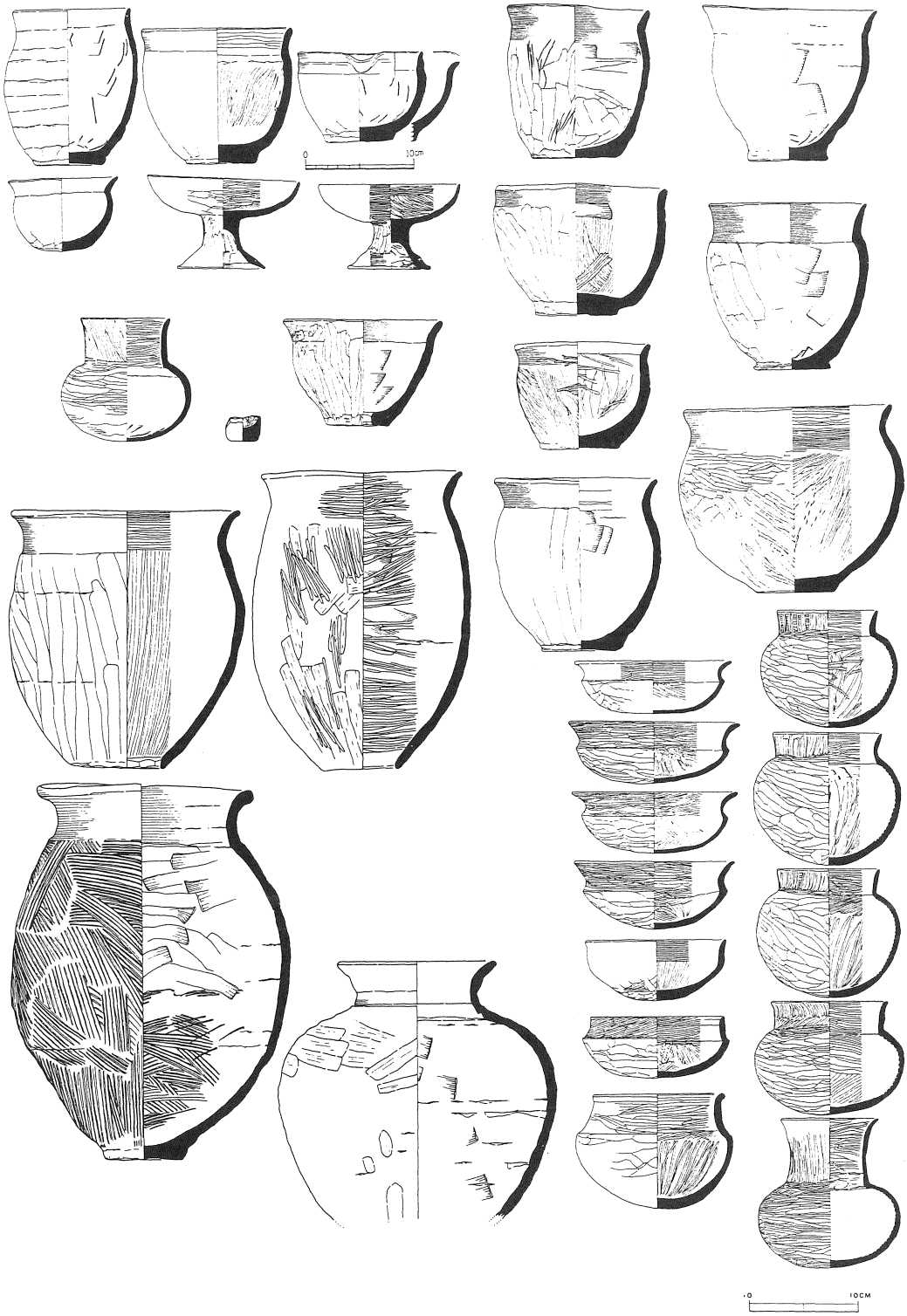
坏・埦類は坏Ｄ・坏Ｅを主体とし、坏Ｃのうち口縁部が外傾するもの・内傾するものがやや多くあり、坏Ａがごくわずかにある。坏Ｃ・坏Ｄ・坏Ｅの大半の個体には内面に黒色研磨処理が施されている。坏Ｄ・坏Ｅの形態は佐平林遺跡の「佐平林式」（新）段階のそれに近似しており、坏Ｃの口縁部の外傾・外反度は仙台湾編年の「栗囲式」のようにかなり寝る感じではない。調整も坏Ｅのうち内面の稜が鋭いものに入念なミガキが施されるのをはじめ、まだミガキを多用する傾向が残っている。高坏は「佐平林式」の坏Ｅのような坏部をもつもの、同じく坏Ｂ類似の坏部をもつものが



第５図　福島県南地域の古墳時代後期土師器(5)〔舞台式段階〕
（舞台遺跡１号住）

あり、双方とも短脚で中実の、ゆるく段をもって裾部の外反する脚部をもつ。

坩は長頸のものと短頸のものに分かれるが、いずれも頸部は直立し、口唇部はゆるく外反する。胴部はややつぶれた球形である。調整は口縁部・頸部外面はタテミガキ、同内面と胴部外面はヨコミガキ、胴部内面はナデまたはミガキで、入念な調整を施す。内面全体あるいは口縁部内面を黒色



第６図　福島県南地域の古墳時代後期土師器(6)〔舞台式段階〕
(舞台遺跡２・５・９・12・13号住から抜粋)

処理したものもある。報告書で壺に分類されている大型甕があるが、器形は須恵器大型甕のような大きく胴の張るもので外反する口縁部はかなりしっかり作られている。壺的機能はあると思うが、丸胴甕とすべきものであろう（第6図下端中央）。

鉢は小型甕に分類されたものの中にある広口形態のものである。13号住居跡に2個体あるが、全体から見れば少数である。大きい方は頸部でゆるく屈曲し、口縁部は小さく外反、ややつぶれた球形胴と平底を持ち、胴部外面と内面はミガかれる。小さい方はややボテッとした作りで、器壁は厚い。口縁部直下の胴部上端が最大径で直立する口縁部の径と変わらない。胴部下端に向かってゆるやかにつぼまり、平底の底部に移行する。胴部外面ヘラケズリ、内面ミガキである。

小型甕は個体数も多く、バリエーションも多い。頸部でゆるく「く」の字に屈曲し、やや丸い胴部・平底を呈することが共通するだけで、口縁部に最大径があるもの・口縁部径と胴部最大径が等しいもの・胴部径が口縁部径をわずかに上回るものに分かれ、胴部内外面ミガキのものは少なく、外面タテケズリ・内面ヘラナデが主体的である。

大型甕は前段階よりわずかに長胴化が進んでいるようであり、口縁部の長さ・外反度はやや退行気味である。しかし、胴部がやや丸く張り出す器形は引き継がれており、関東地方のような変化を辿らないようである。頸部に一定の直立部分を持ち、その上に外反する口縁部を作出することがこの時期の特徴であろう。調整にミガキを伴うものが全体の1／4程あるが、大半は外面タテヘラケズリ・内面ヨコヘラナデである。なお、外面ハケ調整のものがあるが、これは坏の黒色処理と共に次段階の「栗囲式」併行期の土器の特徴の先取りであろう。

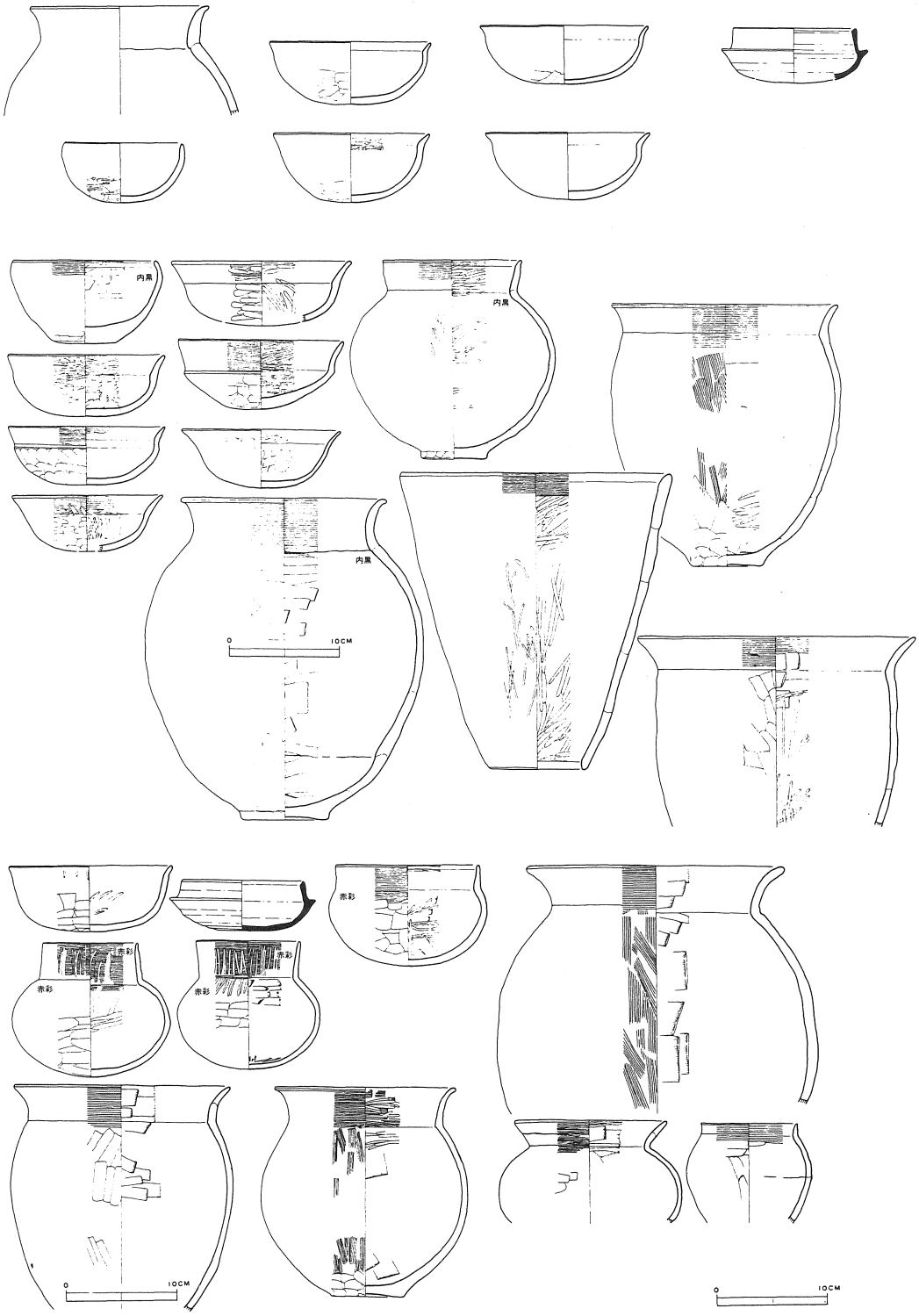
甑は大型と小型に分かれる。大型甑の器形は甕類似の器形から甑専用の器形になっている。わずかに胴が張るが、この段階の甕の長胴化の進行のため、甕の器形をより離れているように見える。内外面ないし内面がよくミガかれる。小型甑は砲弾形を呈するものだが、細かいバリエーションが多く、口縁部が折り返しになるもの・口縁部がゆるく外反するもの・底部が分厚い平底になるものなどがあり、小さな底部を筒抜けにしている。外面タテケズリ・内面ナデないしミガキである。

また、鉢の器形に近い片口土器がある。口縁部は直立し、胴はゆるやかにつぼまり、平底の底部に移行する。内面ナデ・外面ケズリで、片口部の調整はヨコナデ後である。

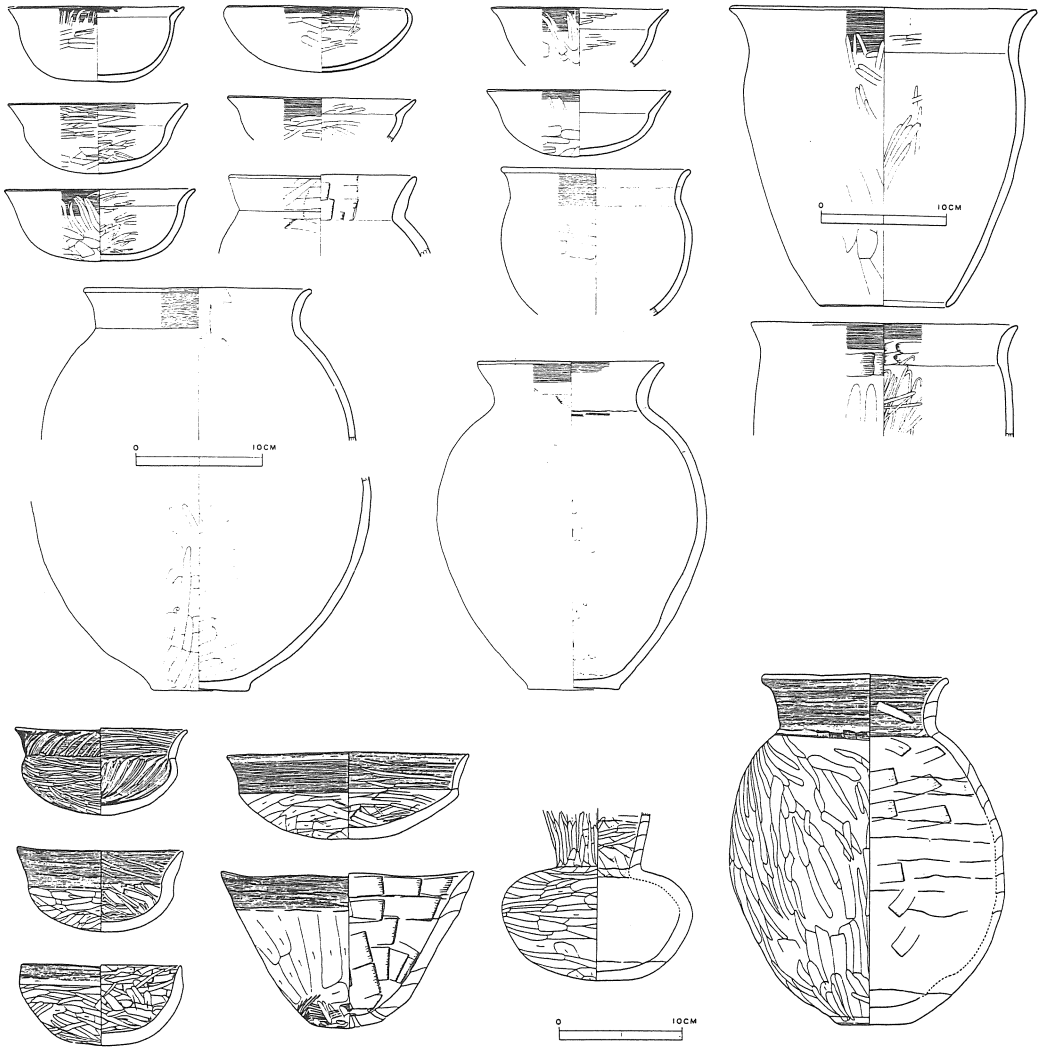
以上、見てきたように舞台遺跡の「舞台式」は「佐平林式」（新）段階と共通する要素が多く、坏の内面黒色処理や甕のハケ調整の出現など、「栗囲式」に繋がっていく要素も見られる。須恵器の共伴がないので確実ではないが、6世紀後半代の中に位置づけられ、一部は6世紀末葉あたりまで下るであろう。

(2) いわき市域

福島県南部でも太平洋に面する浜通り地方のいわき市域は中通り地方と異なり、関東地方や仙台湾周辺地域の土器様相の影響を強く受けた土師器群が古墳時代初頭から奈良時代以降まで確認されている。古墳時代後期の土師器を最も多く出土した朝日長者遺跡・夕日長者遺跡（註32）においてもかかる傾向が明瞭に認められる。以下、この2遺跡の資料を中心としていわき市域の土師器群について述べたい。古墳時代後期にかかる土器群を出土した遺跡は他に大畑貝塚・日吉下遺跡・龍門



第７図　いわき市域の古墳時代後期土師器(1)〔広岡編年Ⅲ・Ⅳ期〕
（上：Ⅲ期夕日長者遺跡40号住，中：Ⅳ期朝日長者遺跡35号住，下：Ⅳ期同41号住）



第８図　いわき市域の古墳時代後期土師器(2)〔広岡編年Ⅳ期〕
（上：朝日長者遺跡74号住，下：応時遺跡２号住）

寺遺跡・内宿遺跡・久世原館跡・応時遺跡などがあるが、大筋では朝日長者遺跡・夕日長者遺跡の土器様相に合致するので必要なもの以外の資料は割愛する。

朝日長者遺跡・夕日長者遺跡はいわき市南部の小名浜湾を東に臨む丘陵の上に占地し、小名浜臨海工業団地第２期造成工事に伴う発掘調査によって朝日長者遺跡108軒、夕日長者遺跡79軒の住居跡が検出されている。このうち、古墳時代後期前後に属するものは朝日24軒、夕日39軒である。

本稿に該当する部分は調査報告書では「古墳時代中期―後期」・「古墳時代後期１」の区分で記述されているが、「万葉の里シンポジウム」における広岡敏氏の編年では近隣の他の遺跡の資料を含めて「南小泉式」（古）段階から「栗囲式」（新）段階併行期まで８期に分期されているうちのⅢ期（「南小泉式」［新］段階）からⅤ期（「住社式」［古］段階にあたる。ここでは、特定の住居跡については述べず、報告書や広岡氏の編年に沿って器種別に整理するに止めたい。

広岡編年Ⅲ期には坏Ａ、丸底で体部と口縁部の区別がほとんどない坏（坏Ｆとする）、大型甕などがある（第７図上段）。

坏ＡはⅡ期（「南小泉式」［中］段階）に定着したが、Ⅱ期のものは大半が平底であり、この段階で丸底化している。内面の稜の明瞭なものとややあまいものがある。口径が比較的大きく、Ⅱ期のものより浅い感じになる。調整は丁寧であるが、内外面ともよくミガかれるⅡ期と異なり、ナデ主体のものが増加し、ミガキの省略されたものもある。坏Ｆは半球形を呈するもので、東京湾岸の鬼高式（古）段階に出現する丸底の坏に類似する。大型甕は大きく張る丸い胴を呈するもので、頸部が「く」の字に屈曲し、口唇部で強く外反する。Ⅱ期の甕とあまり変化がない。

ＴＫ23～47型式の須恵器坏が共伴しており、５世紀後半～末葉の年代を想定できる。この段階ではⅡ期までにかなり個体数のあった古墳時代前期型の坩・高坏がほとんど消滅してしまう。

Ⅳ期（「引田式」［新］段階）（第７・８図）では坏のバリエーションが目立ち、大型・小型の甕、大型・小型の甑、大型化・変形した坩などがある。器種構成の主体が完全に坏と甕になっている。

坏Ａは少数となり、内面の稜が大きく下って坏Ｅに変化してしまったものが多く、坏Ｂ・坏Ｃ・坏Ｆもある。坏Ｂは底部が厚く深身のもの（朝日長者35号住）と、口径が大きく丸底でよくミガかれるもの（朝日長者74号住）がある。坏Ｃは口縁部が直立する形態のものも散見されるが、大半が口縁部が弱く外傾するもので、関東では６世紀段階に入ってからよく見かけられる形態である。坏Ｅは舞台遺跡のように外面に稜を持ち口縁部が強く外湾するものはなく、内面のみに稜があるものが主体である。坏Ｃ・坏Ｅは入念なミガキ調整の個体が多いようであるが、坏Ｃの体部・底部外面はヘラケズリのみである。この他に、朝日長者41号住には坏Ａの口縁部が弛緩した形態の坏Ｄがあるが、類例の少ない器形である。

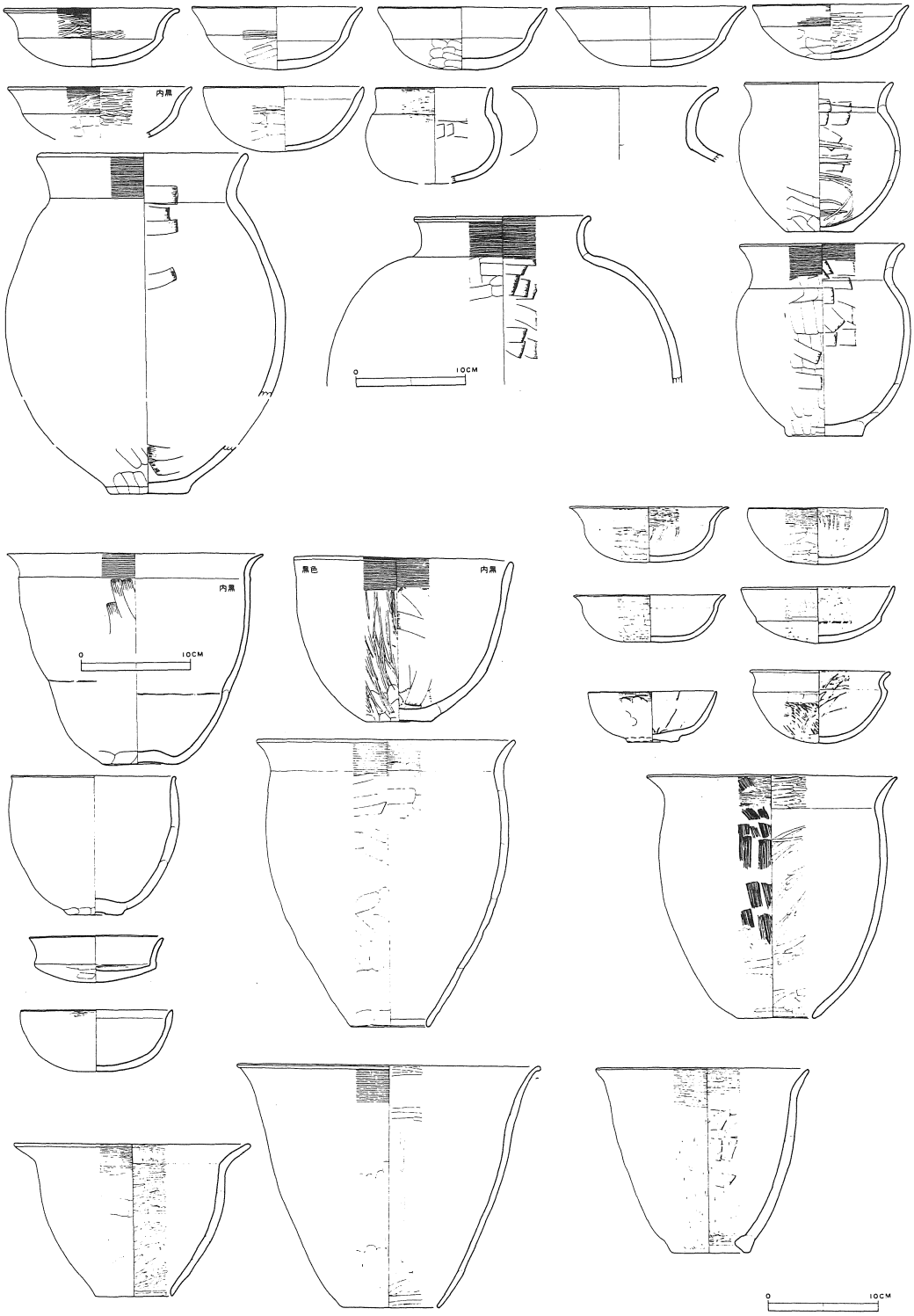
大型甕はまだ丸い胴を持つものが主体であるが、Ⅲ期段階と比較すると長胴化が顕著となって、口縁部もやや長く作るものが増加する。胴の張りの弱い口縁部最大径になるものもある。この時期に出現する小型甕も丸胴形態が多いが、口縁部が長くなることや胴部の張りが小さくなることは大型甕の変化に対応している。

大型甑は無底形で砲弾形の胴部を呈するもので、口縁部が外反するもの（74号住）と、胴部と口縁部の区別がなく直線的に外傾する口縁部を持つもの（35号住）がある。小型甑は胴部から口縁部が直線的に外傾するもので多孔式である。Ⅶ期（「栗囲式」［中］段階併行）には多孔式の小型甑があるようであり、その先駆的形態と考えられよう。

坩は頸部が直立気味で赤彩が施されるものと、頸部が外傾する長頸形態の通有の器形で赤彩されないものがある。Ⅵ期段階にはまったく残らず、関東地方における器種構成の変化の方向性と類似する。

なお、この段階に属する朝日長者41号住にはＭＴ15型式前後に相当する須恵器坏が伴出しており、６世紀初頭から前半あたりの時期を想定することができる。この時期の関連資料として市域南端部にある応時遺跡２号住（第８図下段）をあげておく。

Ⅴ期には坏・鉢・大型甕・小型甕・大型甑などがある。広口の鉢が新たに加わっているが、広岡編年では取り上げられていない（第９図）。



第９図　いわき市域の古墳時代後期土師器(3)〔広岡編年Ⅴ期〕
(上：夕日長者遺跡45号住，中左：朝日長者遺跡31号住，中中：同36号住，中右：同103号住，
下左：夕日長者遺跡35号住，下中：同24号住，下右：同37号住)

坏は坏Ｃと坏Ｅが坏のほとんどの個体を占めるようになる。広岡氏がモデルとした夕日長者45号住では坏Ｃが圧倒的に多いが、この時期に属すると思われる朝日長者103号住・夕日長者37号住のように坏Ｄ・坏Ｅ主体の住居跡もあり、坏Ｃと坏Ｅの比率はほぼ同じと見るべきであろう。坏Ｃは口縁部がやや大きく外傾する形態に変化し、やや外反気味の個体が多い。内面黒色処理されるものも散見し、この段階が舞台遺跡の一群に一部併行する可能性もある。坏Ｅも内外面に稜を持つものと内面のみに稜を持つものの双方があり、口縁部の外反度は大きくなる傾向がある。坏Ｄも同様である。坩の変化形態かあるいは坏Ａの変形したもののような異色な坏があるが、深身のものであり、次段階に後続するものではない。坏Ｆも少数あるが、体部から口縁部は外傾気味の形態に変化している。次のⅥ期段階では、平底化して口縁部が大きく外傾する坏Ｃないし坏Ｅで内面黒色処理されたものに坏が統一されてしまうので、坏のバリエーションの多い最後の段階と考えられる。

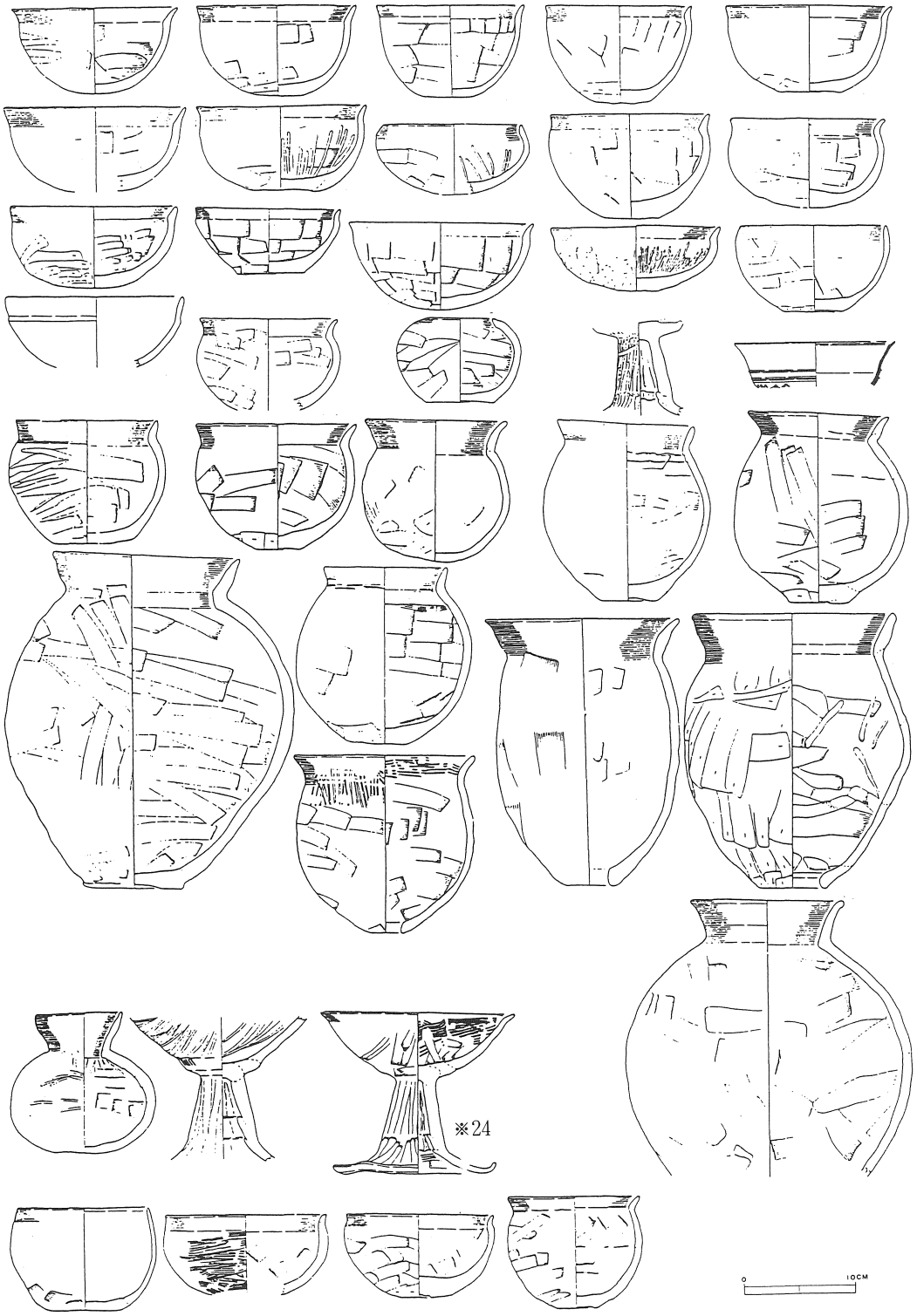
大型甕はさらに長胴化が進むが、まだ前段階からの甕形態を引きずっており、長胴甕の形態に変わっていかない。ただし、頸部はきっちり「く」の字に屈曲しており、胴部と口縁部の調整上の区別も確立している。小型甕はこの時期でも大型甕形態を意識したもので、胴部の張り出し弱く、頸部の屈曲の明瞭なものである。鉢は数少ないが、朝日長者31号住・36号住などで確認できる。口縁部が最大径になり、平底ないし上げ底風平底になる。内面黒色処理される。口縁部は直立するものと外反するものがある。定型化していないが、系譜的につながる鉢はⅥ期にも確認することができる。大型甑は朝日長者103号住、夕日長者24号住・35号住・37号住などで確認することができる。無底形・砲弾形胴部は変わらないが、頸部の屈曲が弱まり口縁部と胴部の区別が曖昧になる個体が多くなる。この傾向はⅥ期以降に著しい。

Ⅴ期は坏Ｃの形態から６世紀中葉から後半あたりに位置付けうるが、「舞台式」の様相と比較すると、一部重複するもののやや古い様相と考えられるので、下限をとると６世紀終末期段階までは下らないかもしれない。続く「栗囲式」（古）段階併行期の土器群の年代の上限が６世紀代に繰り入れられる可能性もあるものと見ておきたい。

朝日長者遺跡・夕日長者遺跡の報告書では「和泉式」・「鬼高式」という関東の土師器型式名が当然のごとく使用されている。確かに遺跡から出土した土器の個体数の中に「和泉式」的な「内斜口縁」坏あるいはまさに「鬼高式」的な坏Ｃが一定の比率を占めているように見える。しかしながら、福島県域特有の坏Ｄ・坏Ｅとの関係を見ると坏Ｃは主体的とは言えないようである。また、高坏・坩などの古墳時代前期型の供膳具についても「塩釜式」・「南小泉式」的色彩が強く、仙台湾系土器群が全体的に優勢である。坏Ａ・坏Ｃ・大型甕の一部に関東的色彩が見受けられるのみで、「栗囲式」の影響が強まると、まったく関東的地域色を失ってしまうと考えてよいだろう。この点では違う意味で関東的な土器を包含する郡山市域とは対照的である。

(3) 県央地域（郡山市域）

郡山市域は、古墳時代後期前後のまとまった土師器群を持つ遺跡が福島県内で最も数多く調査されている地域である。それゆえ、必然的にこの時期を中心とした土器編年が整備されており、細分案も最も細かく分期されている。



第10図　郡山市域の古墳時代後期土師器(1)〔南小泉式（新）段階〕
（上：永作遺跡19号住，下：同４号住，ただし「※24」だけは24号住）

ここでは、柳沼賢治氏の試論（註33）に従って逐次見ておきたい。

まず、「南小泉式」（新）段階とされた資料から取り上げておこう。この段階は市域東部の永作遺跡に豊富な資料があり、４・19・24・57号住などが該当する（第10図）。坏・高坏・大型甕・小型甕・大型甑・小型甑などがある。

坏・埦類は坏Ａ・坏Ｂが主体であるが、永作19号住には坏Ｃかとも思われる破片も存在するが、正確な意味で共伴しているかどうかわからない。坏Ａは小さな上げ底風平底を持つものと丸底のものの比率が拮抗するような状態で、前段階に比較して丸底化の進行が著しい。内面調整はミガキないし丁寧なナデ、外面はケズリ後ナデで、後続段階の土器よりミガキの比率が低い。坏Ｅが定型化する段階に比較して口径・器高ともやや大きめである。口縁部内面の稜は全体的に明瞭である。坏Ｂは深身の椀形態のもの、外面にゆるい稜を持って体部と口縁部の区別があるもの、丸底化したものなどがあり、次段階に続いていかない。坏Ｃの破片は口縁部がわずかに外傾するもので、稜もあまい。深身の器形であり一般的形態でない。高坏は長脚形態で古墳時代前期型の器形である。坏部下端の稜はゆるくなっているか、消失してしまっている。19号住の高坏は短脚化している。脚裾端部がめくれ上がるのは前段階の継承である。坩はやや大型化し、口縁部が内湾するもので、胴部に対して頸部・口縁部は矮小化している。

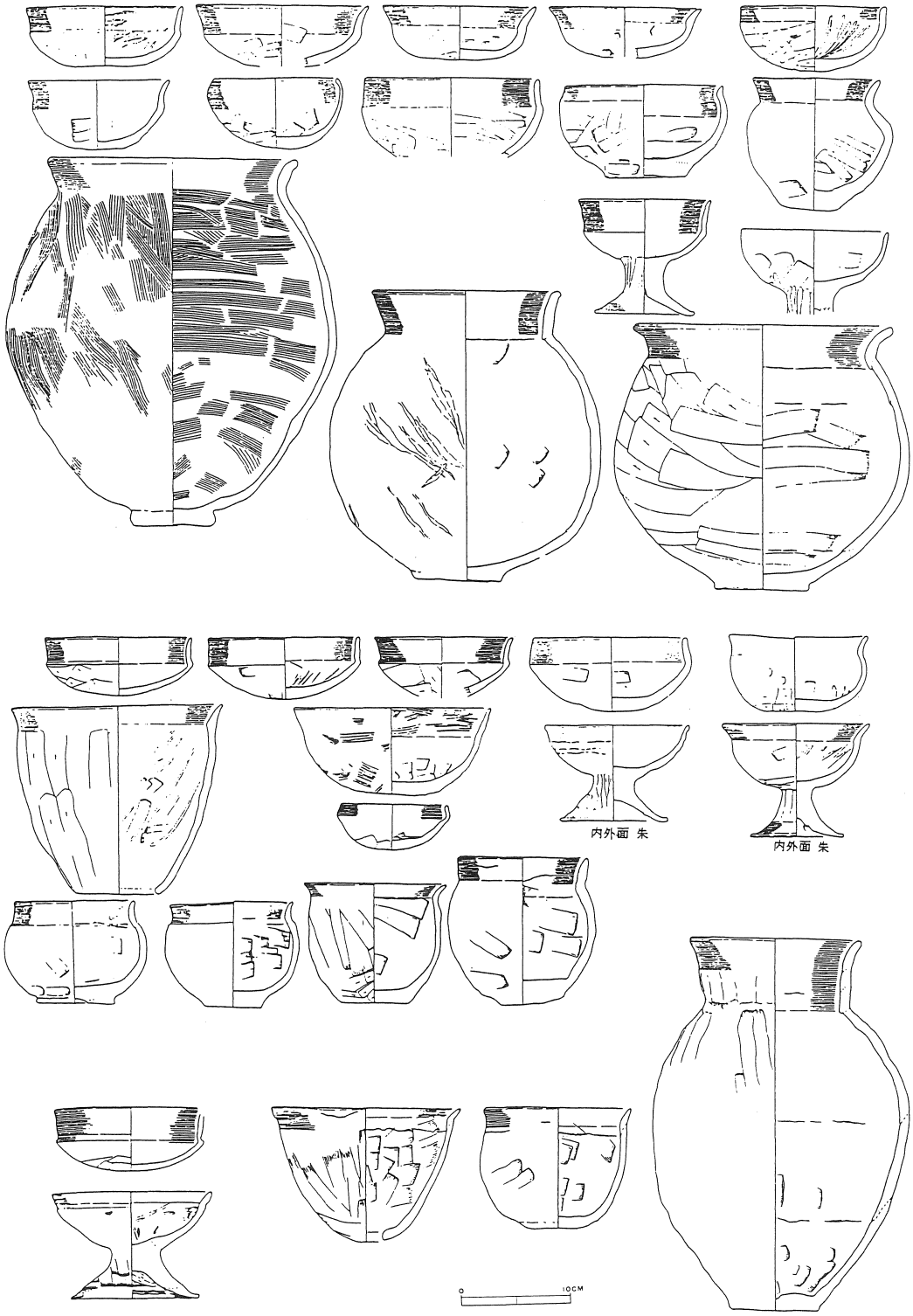
大型甕はやや張り出しの大きいやや丸い胴部を持つが、最大径が胴部上半にあり、撫で肩状になるものが多く、丸胴形態は客体的である。頸部もきっちり「く」の字に屈曲し、長胴化も顕著である。他の地域に先行して「南小泉式」（中）段階でカマドが出現するため、この段階で甕の形態変化も顕著になっていると考えられる。胴部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリの調整だが、一部に外面粗いハケ目という個体もある。小型甕は丸胴形態が主流で頸部の屈曲は明瞭で、上げ底風平底・曖昧な平底・丸底のものがある。

大型甑・小型甑は甕形態に近いものと胴下半部の縮小する甑専用形態のものに分かれるが、胴部がきれいな砲弾形になるものはない。すべて無底形である。ハケ目調整が残るものが少数ある。

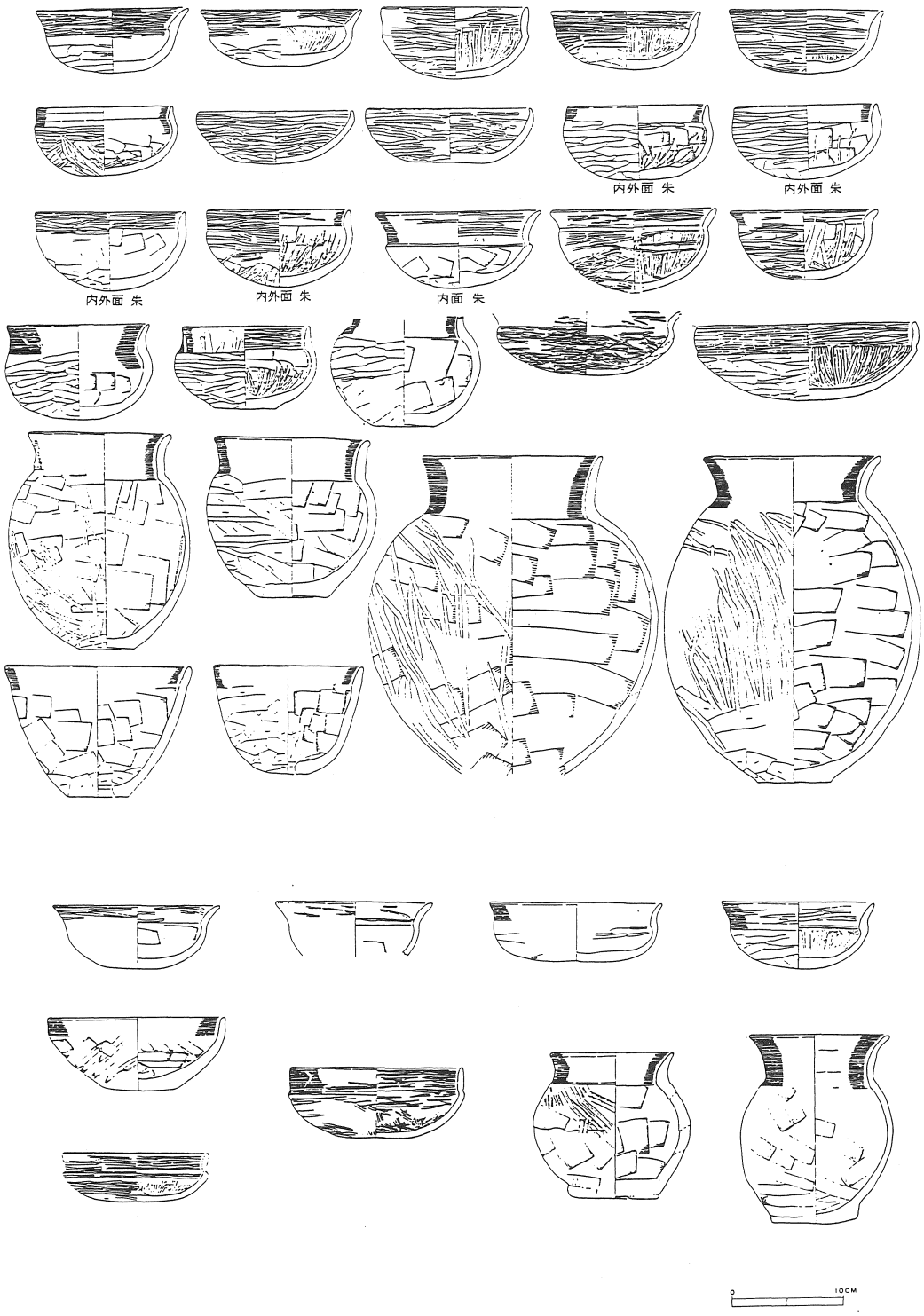
須恵器はＴＫ208～23型式に属する無蓋高坏の破片が19号住から出土しており、５世紀後半段階と考えられている。

次に、「引田式」（古）段階とされる段階であるが、永作３・５・14号住が該当する（第11図）。ここには定型的な坏Ｃが一定量存在し、甑も砲弾形を呈するものに変わる。坏・高坏・大型甕・小型甕・大型甑・小型甑などがある。

坏・埦類は坏Ａ・坏Ｂ・坏Ｃ・坏Ｄ・坏Ｅがある。坏Ｃは須恵器坏蓋を比較的忠実に模倣したものであるが、関東の鬼高式（古）段階に一般的な口唇部沈線または口端面は見受けられず、体部・底部の深さはそれほどない。稜のあまいものも少数あるが、これらはやや口径の大きな深身のものになる。つまり、坏Ｃは大型と中型があることになる。坏Ｂは前段階と同じバリエーションを維持しているが、ヨコナデで体部と口縁部の区別されるものが多い。坏Ａは稜の曖昧になったものであるが、内面稜のある坏Ｅとは区別できるものである。坏Ｅは「住社式」段階に定型的なものが多くなるが、この段階のものはやや扁平な丸底をもつ浅身のもので口縁部も短めで大きく外傾する。坏Ｄもわずかで、坏Ｃの口縁部外反形態のものの稜があまくなったものという印象でみることができ



第11図　郡山市域の古墳時代後期土師器(2)〔引田式（古）段階〕
（上：永作遺跡３号住，中：同５号住，下：同14号住）



第12図　郡山市域の古墳時代後期土師器(3)〔引田式（新）段階〕
（上：山中日照田遺跡Ｃ－11号住，下：同Ｃ－24号住）

よう。

高坏もバリエーションが多いので、坏部形態の違いによって分類しておこう。坏A類似の坏部を持つものを高坏A、坏C形態の坏部を持つものを高坏B、坏部の口縁部付近にゆるい稜を持つが、口縁部が外反ないし外傾するものを高坏C、坏F類似の坏部を持つものを高坏Dとする。脚部はいづれの高坏も短脚・中実・裾広がりで須恵器有蓋高坏の影響を思わせる。高坏Aは外反する口縁部がやや長めに作られ、内外面朱彩される。高坏Bは坏部外面の稜が明瞭で、口縁部は直立し、ごく小さく外反する。高坏Cは口縁部直下に凹凸を伴うゆるい稜を持つものと、高坏Aの口縁部内面の屈曲がゆるくなったような形態の口縁部を持つものがある。前者は内外面朱彩される。高坏Dは半球形の坏部で、口縁部のヨコナデが弱く、坏部内外面の調整はやや強めのヘラナデである。

大型甕は長胴形態と丸胴形態にはっきり分かれ、双方とも口縁部が長めになり、頸部の屈曲が弱まり、口縁部の外反もややゆるくなり、安定した形態を志向するようになる。形態的な完成は次段階であろう。小型甕は胴部の張りが小さくなり、口縁部の外反も弱くなる。鉢形態に近いものまである。甑は前述のように大型・小型ともに砲弾形胴部を呈するものになる。口縁部は短いが、頸部で屈曲して外反する。

この段階は坏Cの形態から5世紀末葉～6世紀初頭あたりに位置付けるべきであろう。（柳沼氏の試論では5世紀末葉。以下年代観の相違は明記する。）

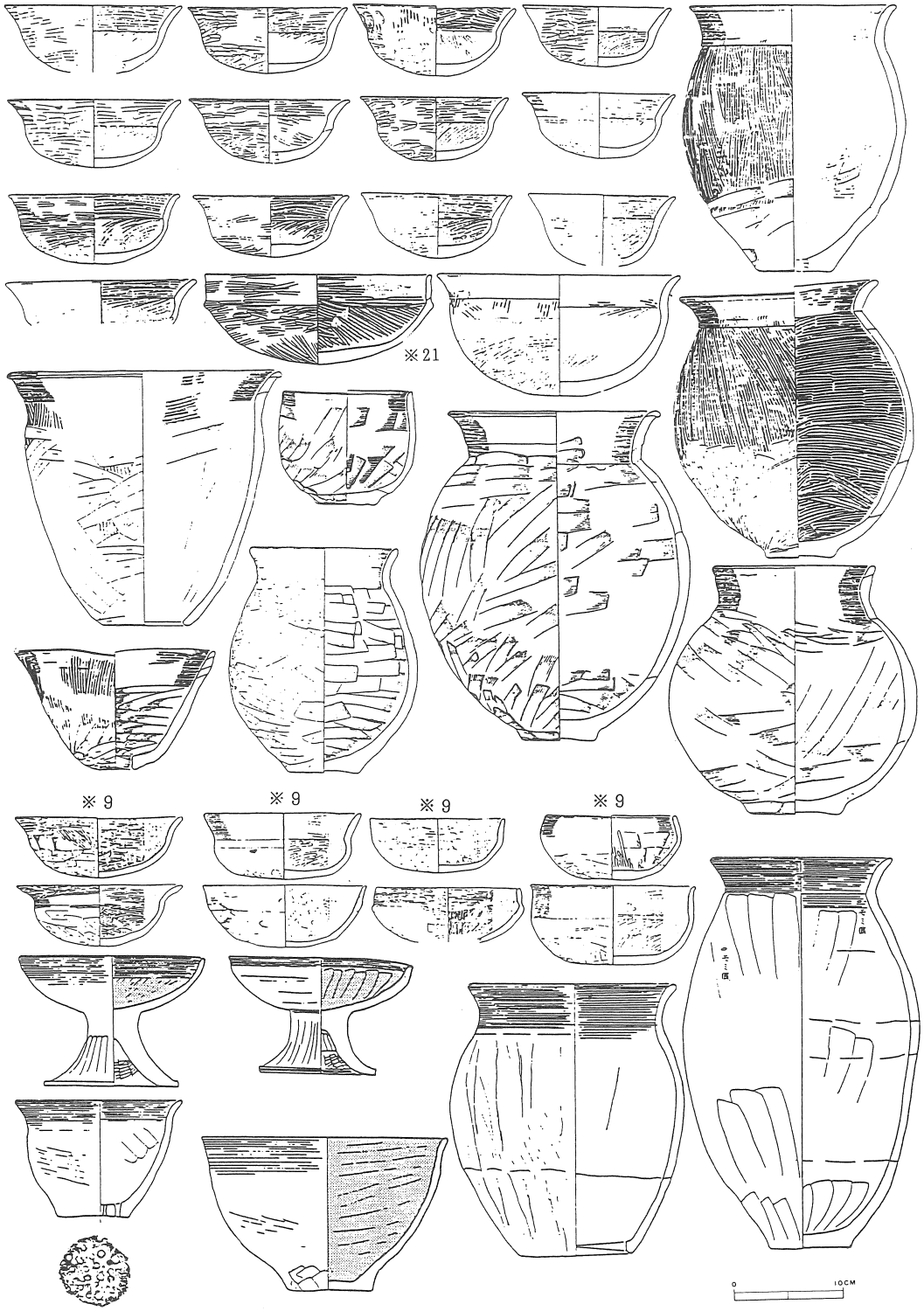
後続する段階は「引田式」（新）段階とされるものであるが、おおむね「佐平林式」併行で前段階との時間差はあまり大きくないように見受けられる。市域東部で永作遺跡に近い山中日照田遺跡のC区11号住・24号住が該当する（第12図）。坏・大型甕・小型甕・小型甑などのような日常用具のみの器種構成となるが、高坏も存在していたであろう。また大型甑も欠落しているが、前段階とほぼ同様な器形のものであろう。

坏はバリエーションが多く、坏A・坏B・坏C・坏D・坏E・坏Fがすべてあり、佐平林遺跡の様相に類似する。坏Aは口縁部がボッテリ作られていたり、稜がゆるかったりするものであるが、内外面はよくミガかれる。坏Fは坏Aの口縁部の屈曲が弱まり、内面の稜がわずかに残るものであり、内外面朱彩が施される。坏Bは扁平な丸底のものと口縁部にヨコナデが施されるものがある。坏Cは直立する口縁部がやや短くなったものが主体で、口縁部がわずかに外傾するもの、内湾するものもある。やはり大型・中型があるようである。坏Eは内面に稜があるものがほとんどで、「舞台式」に通有の坏C変形型はわずかである。坏Dは坏Aの稜がゆるくなったものと、坏Eの稜がゆるくなったものがある。ほとんどの個体が入念にミガかれているが、この調整は山中日照田遺跡の特性かもしれない。

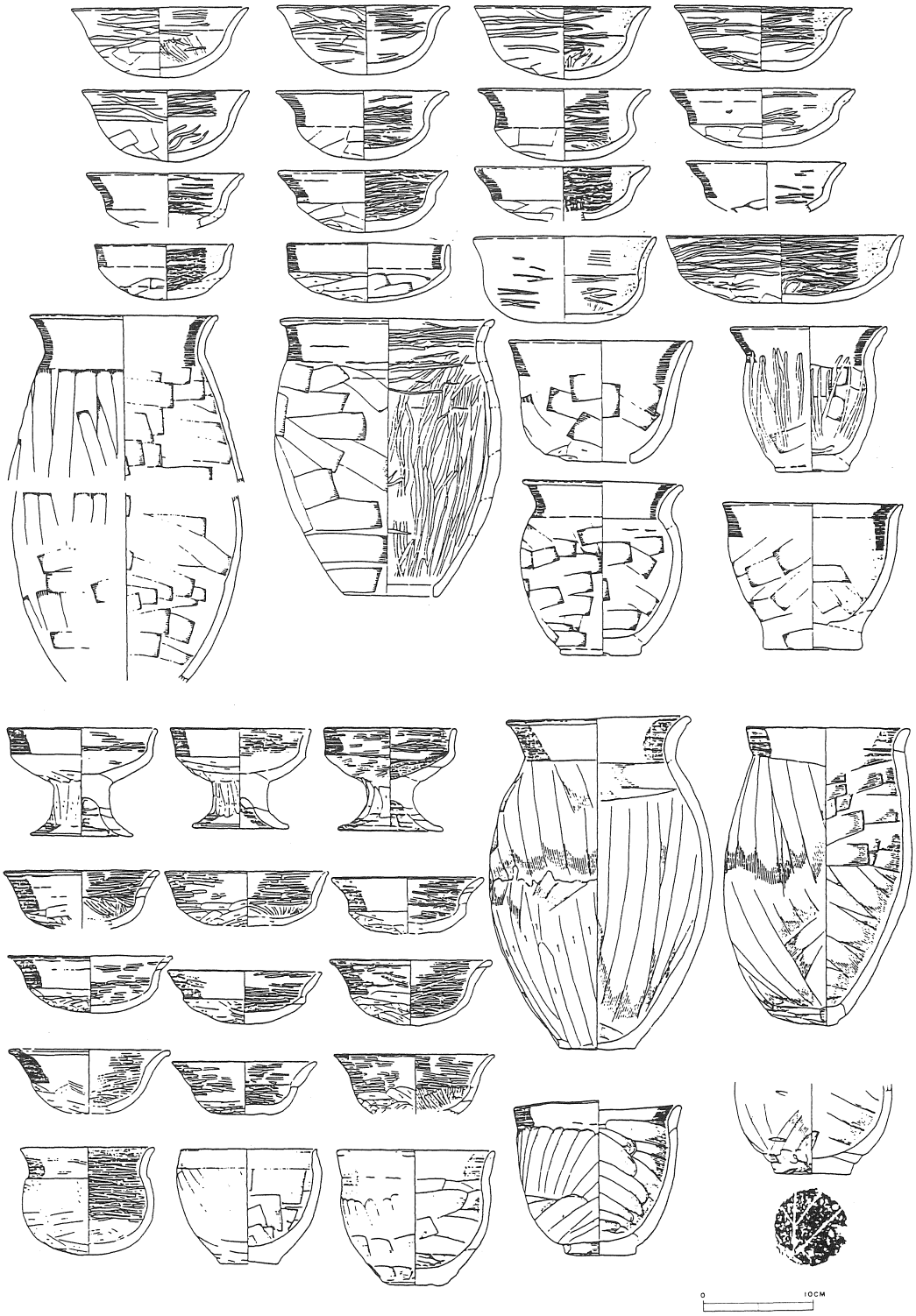
大型甕の特徴は前段階とほぼ同じであり、長胴甕・丸胴甕ともに整った形態になっている。小型甕は大型甕の形態をそのまま小さくしたような整った形態のものになっている。

小型甑は口縁部と胴部の区別が曖昧となったもので、口縁部ヨコナデで胴部との区別をする。底部は筒抜けにならず、平底の中央に小さめの穿孔をする植木鉢的器形になる。

年代比定の材料は多くないが、「佐平林式」の典型的な土器群との様相の類似性から6世紀前半あたりに考えておきたい。（柳沼氏の試論では6世紀初頭。）



第13図　郡山市域の古墳時代後期土師器(4)〔住社式（古）段階〕
（上：丸山遺跡８号住，下：同４号住，ただし「※９」は９号住，「※21」は21号住）



第14図　郡山市域の古墳時代後期土師器(5)〔住社式（新）段階〕
（上：大根畑遺跡２号住，下：丸山遺跡12号住）

続く「住社式」（古）段階は内面黒色処理の坏・高坏の出現期である。市域西部の太田遺跡・丸山遺跡に該当する資料が多い。丸山８・21号住、太田４・６・９・11号住が取り上げられる。器種は坏・高坏・大型甕・小型甕・鉢・大型甑・小型甑などで、前段階とあまり変わらない(第13図)。

坏・埦類はほとんど坏Ｅで占められている。坏Ｃ・坏Ｂ・坏Ｄも少数ながら認められる。坏Ｅは内面赤彩のものを含みながら、内面黒色処理されるものを主体としている。内面のみに稜を持つタイプがほとんどで、口縁部の外反度もやや強めになっている。内外面の調整は入念なミガキになる個体が多い。坏Ｃは口縁部が直立するものと内傾するものがあるが、口唇部の作りは弛緩している。稜が不明瞭になって坏Ｂや坏Ｄの範疇に入るものも見受けられ、須恵器模倣坏依存型の供膳形態を脱却しつつあるようである。高坏も坏部内面が黒色処理されるもので、高坏Ｄあるいは口縁部の稜がゆるくなった高坏Ｃに限られる。やや口径が大きく扁平化した坏部である。

甕は大型・小型とも変化に乏しく、長胴甕・丸胴甕とも安定的形態を保っている。ただし、内面あるいは内外面の調整にハケ目を多用するものがあり、「栗囲式」への型式的傾斜を思わせる。また、鉢形態の登場も注目しておきたい。口縁部に最大径を持ち、口縁部と胴部との区別が曖昧であるが、口縁部のヨコナデとゆるい外反で区別される。小さな平底を持ち、内面は黒色処理される。

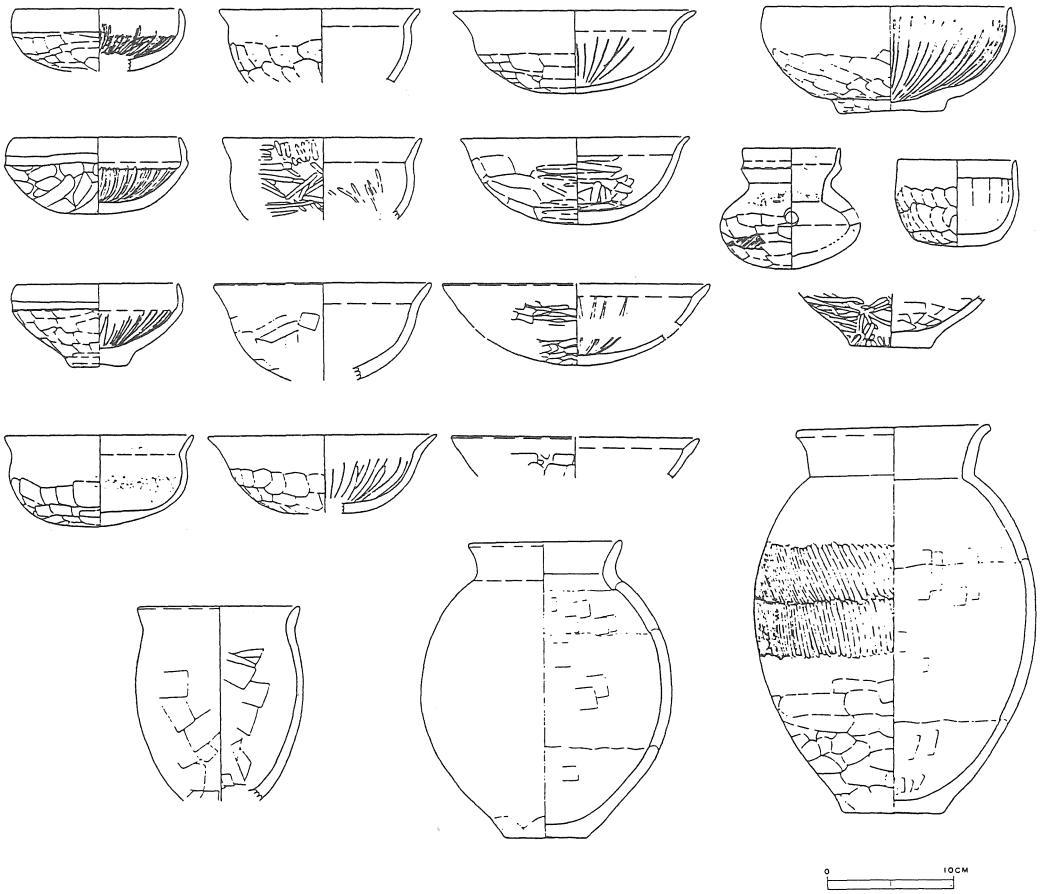
甑は砲弾形胴部のものと甕形態胴部のものがある。双方とも口縁部は外反するが、頸部の屈曲が弱まり、口縁部と胴部の区別が曖昧になる。おおむね無底形であるが、小型甑に多孔式で底部に木葉痕のあるものがある。

この段階も年代推定の根拠になる特徴に乏しいが、黒色処理の出現や坏Ｅの一般化、坏Ｃに須恵器坏身模倣形態が出てくることなどから、６世紀中葉以降の年代に当てるのが妥当であると思われる。（柳沼氏の試論では６世紀前半。）

最後に「住社式」（新）段階とされる段階について述べる。坏・高坏・大型甕・小型甕・鉢・大型甑・小型甑などがある。市域西部の大根畑遺跡２・４・19号住、丸山遺跡12号住などが該当する資料とされている（第14図)。

坏・埦類は坏Ｅが主体であるのは変わらないが、坏Ｃ・坏Ｄもやや多くある。坏Ｅは内面の稜がややゆるくなるものが多いが、「舞台式」にあるような口縁部外湾型の器形になるものもある。坏Ｃは口縁部が直立するものと外傾するものがあり、後者の量が前者を上回るようになる。口縁部直立型の坏Ｃは稜がゆるくなり、体部との境が曖昧になる。口縁部外傾型は口径がやや大きく扁平な器形になるものと口径が小さく坏Ｅに類似するものに分かれる。前段階までの大小の坏Ｃのあり方が外傾形態へ変化しても残っていると考えるべきであろう。坏Ｄは口縁部上半が強く外反する形態のものが多く、「舞台式」やいわき市域の資料と同様な器形変化が認められる。内面黒色処理の一般化とヘラミガキ調整の盛行は前段階より進んでいるようである。高坏は高坏Ｂのみ存在する。坏部外面の稜がゆるくなり、脚裾部の広がりが小さくなる。

大型甕は安定した長胴甕が長胴化のピークに達しており、頸部の作りの弛緩した個体もある。また口縁部が極端に短く外反も弱いものも加わっている。小型甕はバリエーションが多くなり、口縁部・頸部の屈曲・外反がほとんど変わらないもの、口縁部と胴部の境の曖昧なもの、胴部径が口縁部より小さくなったものなどがあり、大型甕の形態を模倣する傾向はもはやない。鉢はやや小振り



第15図　相双地域の古墳時代後期土師器(1)〔引田式（古）段階〕
（浪江町本屋敷３号墳周溝）

で口縁部が弱く外反する形態になり、底部も大きくなって安定した感じになる。

甑は数少ないので傾向がつかみにくいが、大型は胴部が砲弾形と甕形の中間形態であり、やはり口縁部と胴部の区別が曖昧なものである。無底形の底部である。小型は鉢形態に近く、口縁部と胴部の区別ができないが、ヨコナデ範囲の拡張やわずかな外反から考えると、口縁部の長さが胴部の半分程にまでになっているようである。胴部下半はやや急激にちぢまり、無底形の底部である。

この時期は土器群のかなりの部分が「舞台式」と同様な様相に変化するため、「舞台式」併行とみておきたい。前節で見たように６世紀後半の時期を与えることになる。（柳沼氏の試論では６世紀中葉から第３四半期。）先行するいくつかの段階を含めてのことではあるが、結果的には柳沼氏の試論よりもやや新しい年代観を与えることになった。

郡山市域は須恵器模倣坏がややストレートな形で導入されるが、これはカマド出現が福島県の他地域に先行していることやいわゆる初期須恵器を含む古式須恵器の出土も他地域よりやや多く認められる傾向とともに、関東以西の地域に対して交通路としてオープンな状況にあることを証明している。しかしながら、南に対する志向性も「住社式」段階またはその直前あたりから仙台湾周辺地域に対する志向性に徐々に変化してしまい、南への「入り口」を閉ざしていく傾向があるように見

える。また、市域西部の方が「佐平林式」や「舞台式」に近い様相を持つ可能性があり、東部地域と土器の地域色の上では異なることも考慮すべきではないかと思う。

(4) 相双地域・会津地域その他

前節までに資料の比較的豊富な県南地域・いわき市域・郡山市域を見てきたが、その他少量ながら古墳時代後期の土師器群の出土が知られる地域に相双地域・会津地域がある。様相の不明な点が多いが、比較のために触れておこう（註34）。

まず、相双地域である。この地域は太平洋に面する浜通り地方の北半分にあたり、古墳時代に属する遺跡も少なくないが、現在まで発掘調査によって確認されている古墳時代後期の土師器の資料はまだ断片的である。「引田式」併行期のやや古い段階は南寄りの浪江町元屋敷３号墳、やや新しい段階は北寄りの鹿島町大六天遺跡２・５・６・13・16・20号土坑、「住社式」（新）段階併行期とされるものに、北端部の相馬市大森Ａ遺跡１・２号住および大六天遺跡17号土坑がある程度である。逐次見ておこう。

まず、「引田式」（古）段階（第15図）である。古墳の周溝の出土品であるため、若干偏りがあるかもしれないが、坏・大型甕・瑳などがある。

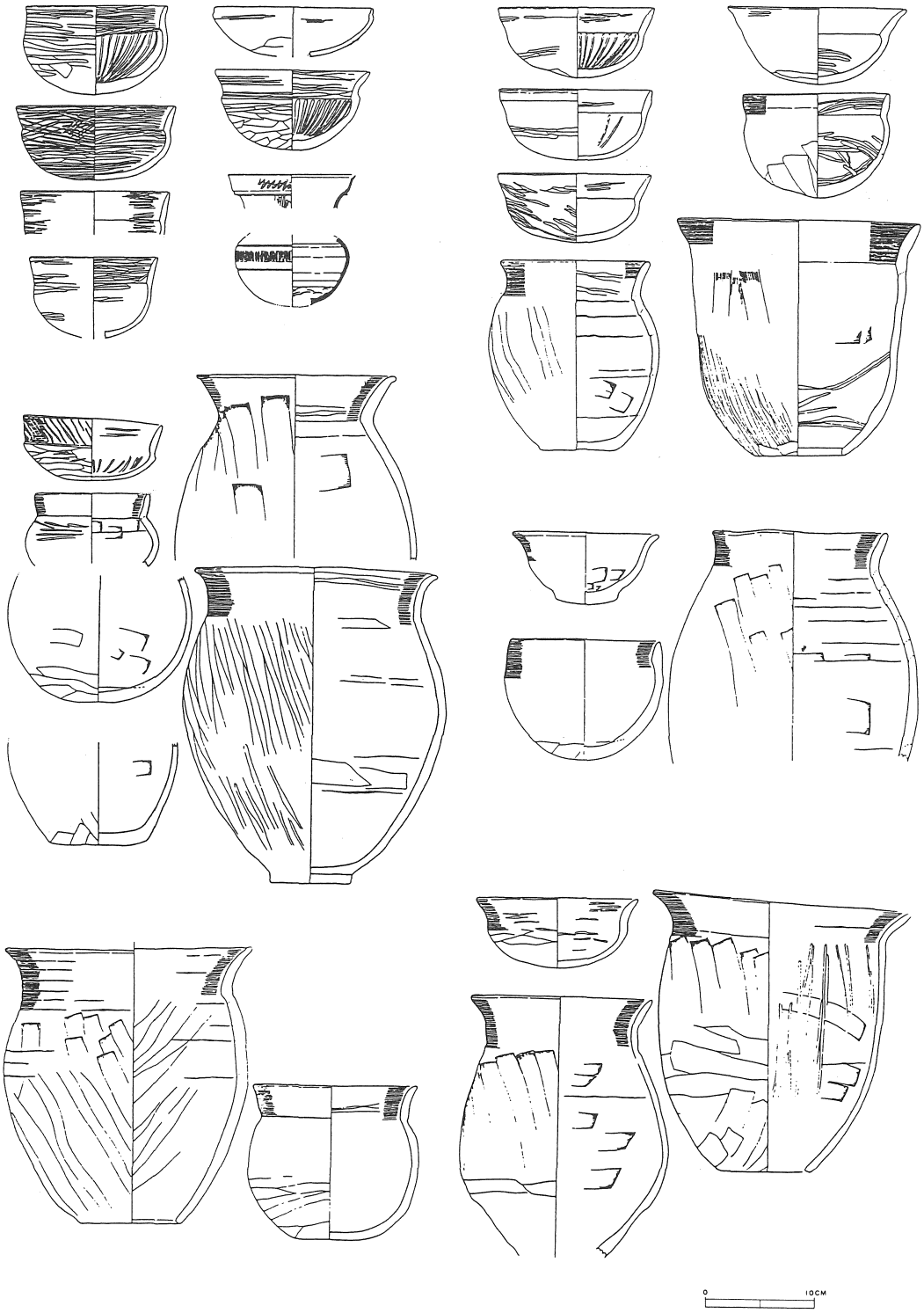
坏・埦類は坏Ａが主体で、少数の坏Ｂ・坏Ｃがある。坏Ａは口縁部がやや長く、稜がややゆるくなったものが多く、口径の大きなものはやや扁平化する。調整はミガキが多用されている。坏Ｂは突出した平底を持ち、内面に放射状暗文が施される。坏Ｃも放射状暗文が施され、内湾する口縁部の外側に沈線で稜を引くものである。瑳は坩の胴部に穿孔するもので、須恵器の忠実な模倣のため頸部は段を持って屈曲し、口縁部は直立する。

大型甕は長胴甕と丸胴甕があり、口縁部は長めで、頸部の屈曲もしっかりしている。他地域と異なり、長胴化の傾向は関東地方と同様に早い。小型甕も長胴甕形態であるが、口縁部は短く、頸部の屈曲もゆるい。

坏Ｃが内湾形態であるのは須恵器模倣坏としては古く、これを根拠にしてよければ、５世紀後半ぐらいの時期を考えることができる。

次に「引田式」（新）段階であるが、「万葉の里シンポジウム」では元屋敷３号墳と共に「引田式」（古）段階とされていたが、土器様相から見て１段階新しく見た方がよい資料であるため、本稿では（新）段階としておく。この段階の資料には坏・大型甕・小型甕・大型甑などがある（第16図）。

坏・埦類は坏Ｅが主体となり、坏Ａ・坏Ｂ・坏Ｃ・坏Ｄなども若干ある。赤彩されるものが多い。大型の坏Ｆか鉢になるような特異な土器もあるが、鉢として扱う。坏Ｅは内面に稜を持つものが大半であるが、内外面に稜を持つものも少量ある。なかには坩の変形したような深身のものもある。口縁部の外反度はそれほど大きくなく、内外面とも入念なミガキ調整を施す個体が多い。坏Ａはやや深身で口縁部の屈曲も弱い。坏Ｂは丸底化しており、口縁部も直立気味である。坏Ｃは口縁部がわずかに外傾するが、稜がしっかり作られ、やや古手に属する須恵器模倣坏の類型に入るものである。坏Ｄは口縁部が外反する坏Ｃの稜があまくなったような形態である。丸味のある平底を持つ変形タイプもある。



第16図　相双地域の古墳時代後期土師器(2)〔引田式（新）段階〕
（上左：鹿島町大六天遺跡20号土坑，上右：同16号土坑，中左：同６号土坑，中右：同13号土坑，
下左：同２号土坑，下右：同５号土坑）

大型甕はほとんど長胴形態であり、丸胴は少ない。長胴甕は定型的な胴部形態に進んでおり、口縁部が長くきれいな「く」の字になるものと、頸部の屈曲のゆるいやや短めの口縁部になるものがある。丸胴甕は頸部の屈曲がゆるく、口縁部の上半で外反するものである。胴部の張り出しはあまり大きくない。小型甕はおおよそ大型甕の形態を模倣するものであるが、底部が丸底や丸めの平底になる。鉢は口縁部が直立し、やや幅広のヨコナデを施すものであり、胴下半は丸く、そのまま丸底になる。

甑は大型しかないが、砲弾形胴部のものと、甕形態の胴部を呈するものの双方がある。頸部の屈曲はやや強めで、長めの口縁部が外反する。

須恵器はＴＫ23～47型式に属すると思われる瑳の破片が２点出土しており、５世紀末葉～６世紀初頭あたりの時期にあたると考えてよさそうである。

飛んで「住社式」（新）段階併行期であるが、この段階では坏・甕を中心とした器種構成が確立している。他に高坏・支脚状土製品などがある（第17図）。

坏はほとんど坏Ｅと坏Ｄであり、内面黒色処理される個体が多い。他に坏Ｃ・坏Ｆなどがある。坏Ｅは口縁部の外反度が強めになる。稜は弱めで坏Ｄとの区別がむずかしいものもある。坏Ｄは体部・底部が浅く口縁部が長いものが多く、坏Ｅの形態に近い。坏Ｃは口縁部がゆるく外反ないし外傾するもので、稜が沈線化したもの、稜があまくなったもの、体部・底部が扁平化したものなどがある。稜がほとんどなくなって坏Ｄの一類型になったものもある。坏Ｆはわずかに稜の痕跡が残っているものと、口径が小さく深身になるものがある。高坏は高坏Ｄであるが、口径が小さく坏部は深い。脚部が中実に作られる点は他地域とほぼ同じ特徴である。

甕は大型というよりは中型のもので、頸部の屈曲がゆるく、口縁部の外反も小さい。胴部の張りの小さい長胴形態で、やや丸めの平底である。支脚状土製品が出土しているが、筒状の体部・裾広がりの底部・平らな天井部を呈し、天井部中央には穿孔される。

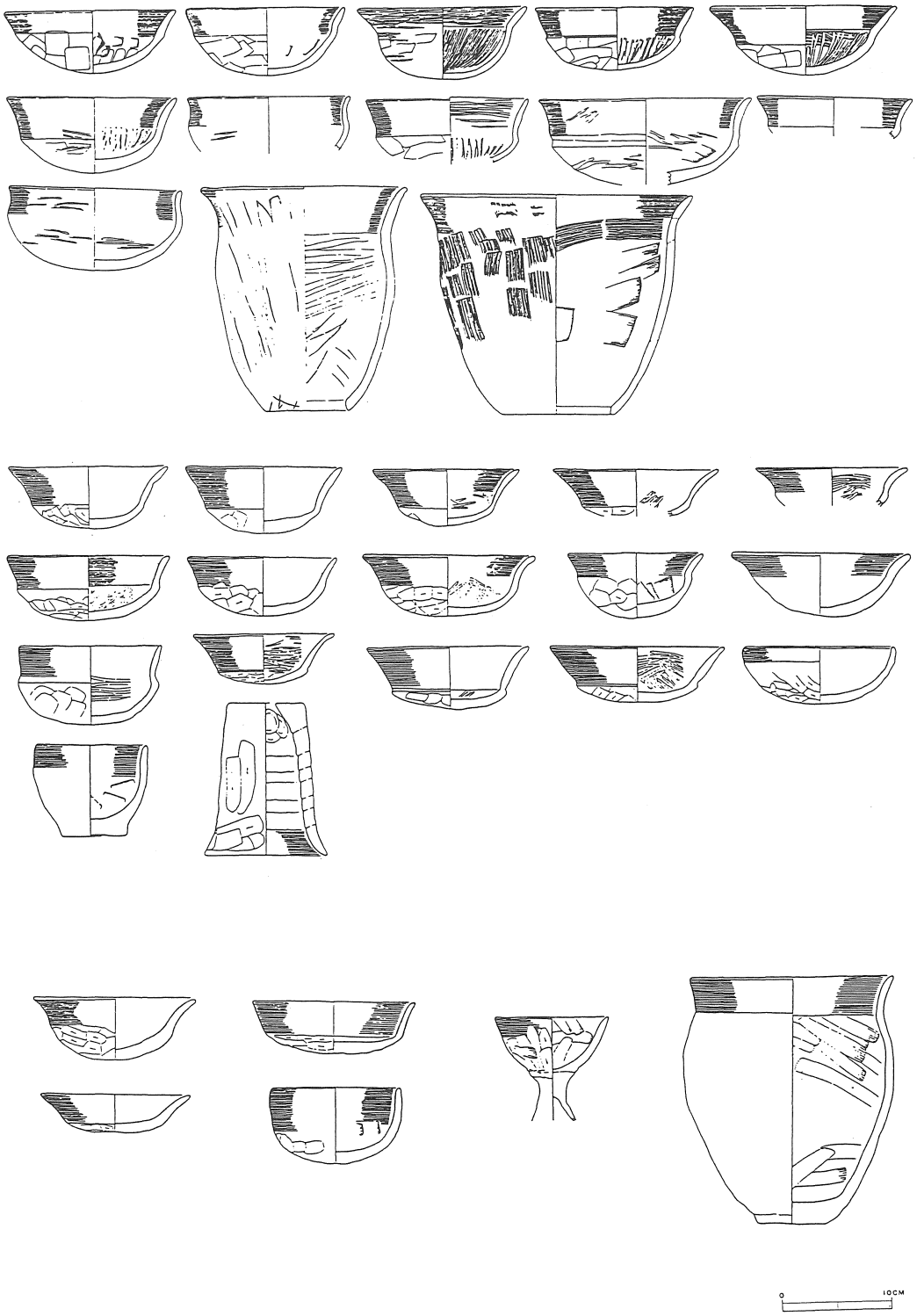
甑は大型のみ確認されている。砲弾形胴部で、口縁部と胴部の境目は不明瞭だが、ヨコナデで区別される。口縁部はゆるく外反する。粗いハケ目で調整されているものもある。

坏Ｃの形態から考えると、６世紀後半あたりの年代で把握することができる。

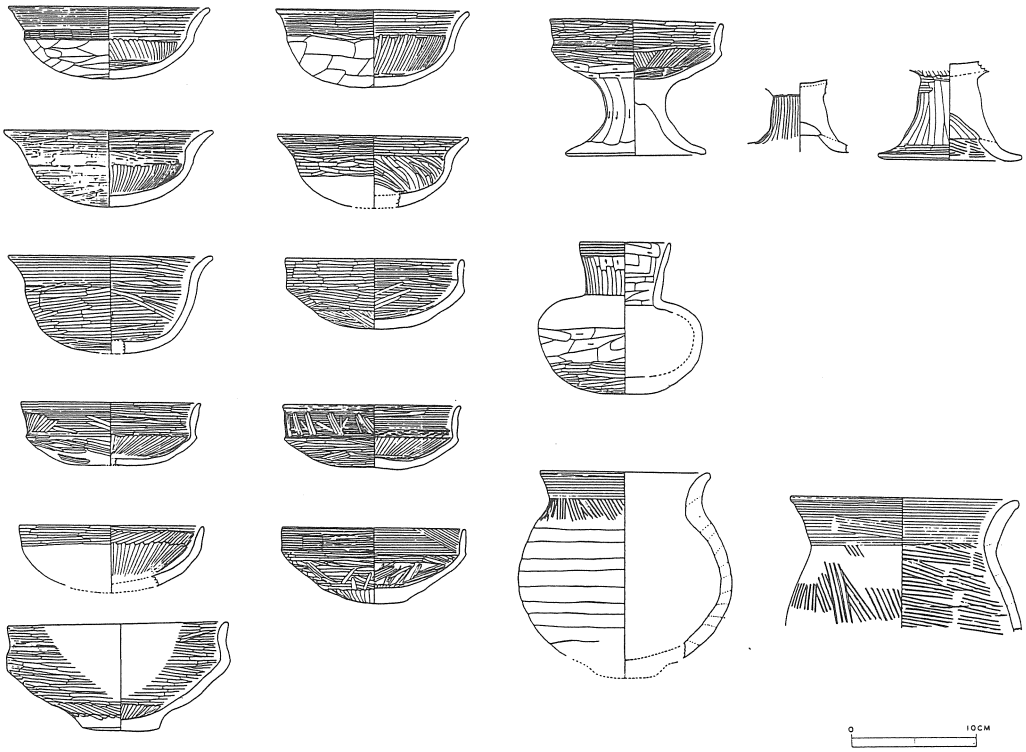
坏Ｄ・坏Ｅなどの形態の変遷からは相双地域の土器がいわき市域の土器群よりは郡山市域の土器群に近いような印象で見ることができる。ただし、長胴甕の長胴化が早い点、典型的な坏Ｃが確認されない点、坏Ｄ・坏Ｅの口縁部がやや長めである点など細部では地域色の相違と考えた方がよい特徴もある。

次に会津地域であるが、現在までわずかに１遺跡、会津高田町十五壇遺跡第１次調査区１号住居跡から「舞台式」併行期とされた土器群が出土しているにすぎない（第18図）。ここには坏・高坏・坩・大型甕・小型甕があるのみである。

坏・埦類は坏Ｅ・坏Ｄが主体で坏Ｃ・坏Ｆなどもある。いずれもよくミガかれる土器である。坏Ｄ・坏Ｅとも口縁部の外反度が大きいもので、内面黒色処理されている。坏Ｃは口縁部直立形態であるが、体部・底部が扁平化しているもの、稜がゆるくなったり不明瞭になったりしたものがある。坏Ｆも稜の消失した坏Ｃと考えた方がよいものである。高坏は高坏Ｂであり、坏部はこの住居跡の



第17図　相双地域の古墳時代後期土師器(3)〔住社式（新）段階〕
（上：鹿島町大六天遺跡17号土坑，中：相馬市大森Ａ遺跡１号住，下：同２号住）



第18図　会津地域の古墳時代後期土師器〔舞台式段階〕
（十五壇遺跡第１調査区１号住）

坏Ｃの形態である。中実気味で裾のあまり広がらない、短脚の脚部である。坩は胴部に対して頸部のやや矮小代したもので頸部の開きも小さい。

甕は大型・小型とも頸部の屈曲のゆるいもので、ハケ目調整の胴部である。

田中敏氏の指摘のとおり、「舞台式」・「住社式」併行期と見ることができ、６世紀後半の年代を与えることができる（註35）。

ここまで、福島県域を５ヶ所に分けて土器の実態について述べてきたが、この５地域はそのまま５つの地域色にあたるものと考えることもできる。しかし、前述したように郡山市域は東西２つの小地域に分けられるかもしれず、５つ以上になる可能性もあることになる。大きくまとめると、全体的に関東色が強いと思われるいわき市域と、それ以外のすべての地域の２つになるが、これは相双地域―郡山市域―母畑地区という南北ルートと常磐―仙台湾ルートという直接的交通路が成立しているいわき市域の２つの流れという見方につながることになる。

４．古墳時代後期土師器群の地域性 ―「佐平林式」・「舞台式」と関東の土器群―

前章において福島県域の各小地域の土器群を観察してみた。そこには大きく見て２つ、細かく見ると５つ以上の地域色ある土器群の存在を確認することができた。本章においては前章の観察を踏まえて北関東の土器群との交渉のあり方を若干指摘しておきたい。

群馬県域の土器群についてはすでに田中広明氏の広範な考察があるほか、松本保氏の北毛地域の

土器群の考察と福島県白河市明戸遺跡の資料の比較もある（註36）。松本氏は月夜野町・沼田市・渋川市などで発掘調査された古墳時代後期の遺跡の中から諏訪遺跡・石墨遺跡・糸井宮前遺跡・中村遺跡・村主遺跡・門前Ａ遺跡・後田遺跡の７遺跡を取り上げ、内面黒色処理される坏・高坏を中心に全器種の分類・編年を試み、群馬県の平野部の土器群との相違点を整理し、南東北・新潟・長野の「黒色土師器」との類縁性を指摘しながらも、器形面の相違から同一視せず、北毛地域独自の土器群として「諏訪型土器」という概念を提唱された。

確かに、個々の土器を比較すると相違点が目立つが、前章で坏Ｅとして扱ってきた福島県域特有の「在地型坏」のうち、６世紀後半段階に認められるものの類型の一部と松本論文65ページに図示された坏Ｃ類・Ｅ類・Ｊ類などは近似するものが指摘できる。明戸遺跡との比較も大筋では正しいと思われる。ただし、明戸遺跡の資料よりはやや古い段階にあたる郡山市丸山遺跡・大根畑遺跡・天栄村舞台遺跡の該当する時期の資料の方がより近いという印象がある。ほぼ同時代的に影響を与えられていると考えておきたい。ただし、坏類以外の器種には目立った類似性は見ることができず、土器の交流関係は極めて限定的で、人的交流はさらに細々としたものであると考えざるをえない。１本の細い糸が福島県南部から北毛地域に繋がっていたという程度の交渉なのであろう。

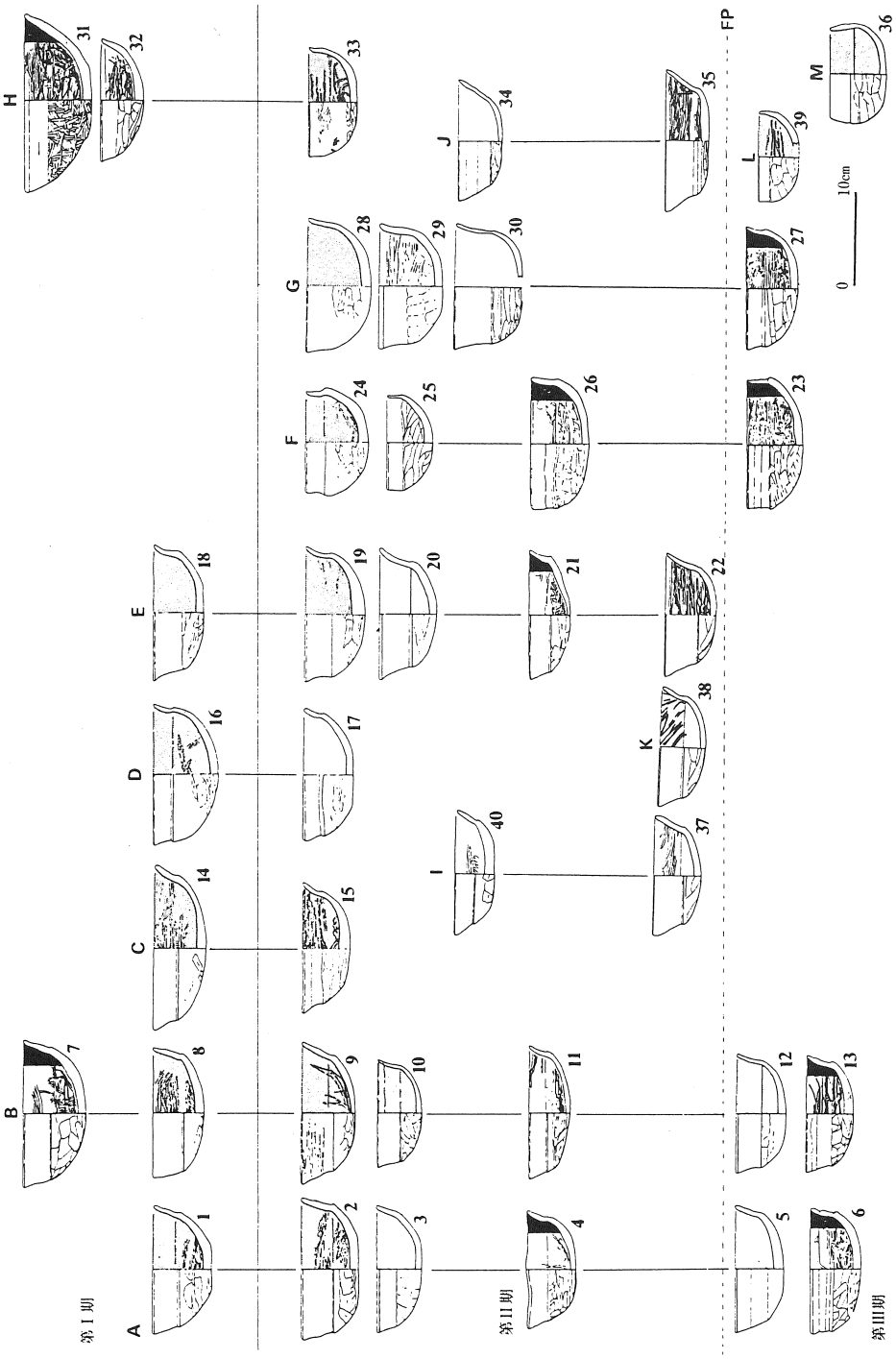
栃木県域ではどうであろうか。県の北部においては古墳時代後期の遺跡の発掘例が少ないので、福島県域の土器の影響を考えることのできる資料はたいへん少ないと思われる。わずかに宇都宮市聖山公園（根古屋台）遺跡14号住居跡（註37）に坏Ｅ類似の土器が２点、宇都宮市猿山遺跡１―16号住居跡（註38）で坏Ｄ類似の土器が１点だけ確認できた。聖山公園遺跡の２点のうち１点は内外面赤彩が施され、口縁部の外面と内面全体が入念にミガかれていた。器形は稜がやや曖昧で口縁部の外反が大きいものである。一見した感じでは郡山市域から相双地域にかけての土器に印象が近い。共伴資料は６世紀中葉から後半にかけての土器群と考えてよいものである。ここでも限定的交流しか思い浮かばない。

茨城県域でも坏Ｅ類似土器は散見されるようであるが、やはり極めて少数である。あまり探索していないが、筑波町小田橋遺跡、水戸市大塚新地遺跡などに見られるようである（註39）。細かい特徴まで類縁性があるかどうか検討が必要である。

福島県域を主体に考えると、前述したように５世紀後半から須恵器模倣坏・砲弾形大型甑・カマド導入など関東地域からの強い文化複合の侵入が始まり、在地的な土器群を変化させていく。しかし、６世紀前半の定着期を過ぎる頃から、北の土器の影響が強くなり、６世紀後半の新しい段階ないし７世紀初頭には土器群の関東的地域色は一掃されてしまう。エミシの主体性の強まる時期の問題として考えざるをえないのである。

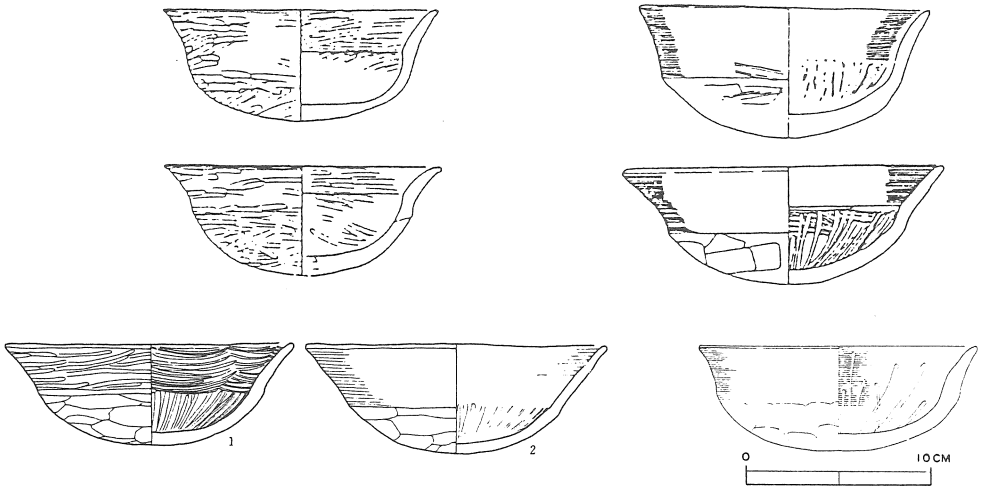
５．おわりに

古墳時代後期の福島県域においては関東とやや異なる独自の須恵器模倣坏（本稿の坏Ｃ）・「内斜口縁」坏の系譜の土器群（本稿の坏Ｅ）が存在し、一定の地域性をもって小地域土器群に分かれることが想定できることが本稿においても再確認することができた。そして、それらのうちごく一部の類型に属する坏に近似するものが栃木・群馬の北寄りの地域および茨城に少数出土していること



第3図　坏分類・編年表

第19図　松本保氏の北毛地域古墳時代後期坏分類図（註36文献から転載）



第20図　坏Ｅと坏Ｅ類似土器の比較
（上左：郡山市丸山遺跡８号住，上右：鹿島町大六天遺跡17号土坑，下左：宇都宮市聖山公園遺跡14号住，下右：宇都宮市猿山遺跡１―16号住）

も明らかになった。この事実については「佐平林式」・「舞台式」の概念を尊重して考えねばならないとは思うが、相馬―郡山―宇都宮あるいは郡山―舞台―明戸―北毛という土器の類縁性からはこれらの型式概念の有効性を含めた土器群の特徴に関する再検討が必要である。もちろん、調査例が少ない地域も多く存在するため、現時点で想定される地域色の認識が全面的に正しいかどうかは検討の余地があろう。この点については、将来関東地方の古墳時代後期土器群の地域性について巨視的に考える機会を持った時に再考したいと思う。

末筆になったが、本稿完成までの間に多数の方々にご教示・ご協力いただいた。高橋信一・柳沼賢治・佐藤典邦の各氏には母畑地区・郡山市域・いわき市域の土師器の見学に便宜をはかっていただき、土器の認識についても種々のご教示をいただいた。河野喜映・福田健司・笹森健一・坂野和信・酒井清治・渡辺一・飯塚博和・中村倉司・鈴木徳雄・桜岡正信・水口由紀子・田中広明・大谷徹・大屋道則の各氏には土師器の検討にあたってご指導・ご教示いただいた。宮瀧交二・村田章人両氏には執筆の合間に執筆方針について筆者の意見を聞いていただき、時には挫折しそうになる筆者を激励していただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

なお、本稿は埼玉県埋蔵文化財調査事業団から筆者に与えられた昭和63年度研究助成の対象研究「埼玉県北部における古墳時代後期土師器の編年と地域性」の成果の一部である。

＜註＞

註１　利根川章彦　1982　「古墳時代集落構成の一考察 ― 児玉地方の５～８世紀における集落群の動態と土師器の変遷を中心として ―」『土曜考古』第５号

ただし、この編年案のⅨ期とその前後の暦年代について下記文献で補正した。

利根川章彦　1984　『県道蛭川・普済寺線関係埋蔵文化財発掘調査報告　向田・権現塚・村後』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集　207～208ページ

註２　水野正好　1969　「縄文時代集落復原への基礎的操作」『古代文化』第21巻３・４号
住居の遺跡内移動・移築に関する法則性について他に体系だった考え方が示された論考は皆無に等しい。

註３　大屋道則　1990　「中田以前の土師器研究～編年研究の原則と分類視点の変遷」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団　研究紀要』第７号　100～120ページに詳細に解説されている。

註４　杉原荘介　1943　『原史学序論』　葦芽書房

註５　代表的なものとして下記文献がある。
玉口時雄　1972　「土師器」『新版考古学講座　５　原史文化〈下〉』　雄山閣

註６　岡田淳子・服部敬史　1968　「土師器の編年に関する試論」『八王子中田遺跡 ― 古墳時代集落址の調査 ― 資料篇Ⅲ』　八王子市中田遺跡調査会

註７　吉田恵二　1979　「平城宮北方官衙出土土器の編年」『平城宮発掘調査報告Ⅶ』　奈良国立文化財研究所

註８　西弘海　1978　「藤原宮西方官衙出土土器の編年と西方官衙についての考察」『飛鳥藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所

註９　田辺昭三　1970　『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古学クラブ
田辺昭三　1981　『須恵器大成』　講談社

註10　中村浩他　1976～78　『陶邑Ⅰ～Ⅲ』　大阪府史跡名勝天然記念物調査概要第29～31輯

註11　岩崎卓也　1964　「東日本における土師器の研究 ― 主として鬼高式土器に関連して ―」『史学研究』72号　東京教育大学文学部

註12　註５に同じ

註13　杉原荘介・大塚初重編　1970　『土師式土器集成　３』　東京堂出版

註14　服部敬史　1972　「ムラの道と仲買人 ― 東京都船田遺跡の集落址 ―」『月報　新版考古学講座　第５回配本第５巻　原史文化（下）』　雄山閣

註15　杉山晋作他　1987　『房総における古墳時代後期土師器の年代と地域性　第６回総括シンポジウム資料集』

註16　東国土器研究会　1989　「黒色土器―出現と背景」『東国土器研究』第２号

註17　万葉の里シンポジウム実行委員会・鹿島町教育委員会　1989　『シンポジウム「福島県に於ける古代土器の諸問題 ― 特に５～７世紀を中心として ―」（資料集）』

註18　長谷川厚　1988　「古墳時代後期土器の研究(2) ― 地域性の諸問題について ―」『神奈川考古』第24号
長谷川厚　1991　「古墳時代後期土器の研究(3) ― 房総地域の諸相について ―」『神奈川考古』第27号

註19　中村倉司　1989　「関東地方における竈・大型甑・須恵器出現期の地域差」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』第６号

註20　村山好文　1985　「印旛沼・手賀沼周辺における古墳時代後期の特異な甕形土器について」『日本考古学研究所集報』Ⅶ

註21　田口一郎　1988　『海行Ａ・Ｂ遺跡』　群馬県箕郷町教育委員会

註22　水口由紀子　1989　「いわゆる〝比企型坏〟の再検討」『東京考古』第７号

註23　田中広明　1989　「上毛野・北武蔵の古墳時代後期の土器生産 ― 土器生産の転換と在地首長制 ―」『東国土器研究』第２号
田中広明　1989　「緑泥片岩を運んだ道 ― 変容する在地首長層と労働差発権 ―」『土曜考古』第14号

註24　この用語は坂口一氏が好んで使用している。本来『「く」の字状口縁坏』などの用語の方が妥当であると思うが、本稿によって命名の混乱を産むのも得策ではないので、とりあえず従っておきたい。和泉式土器を論ずる時にその当否を考えたい。

註25　須恵器模倣坏は種々のバリエーションがあり、時期的変化も多く、模倣対象となる須恵器も各地域の製品がある。現在までにこうした模倣現象のすべてに法則的理解をした論考は皆無である。本稿では、須恵器の器形に関

係性のある個体には広くこの概念を適用する。

註26　目黒吉明他　1978　『母畑地区遺跡発掘調査報告II』　福島県教育委員会・福島県文化センター

註27　高木和夫・大越忠士他　1979　『母畑地区遺跡発掘調査報告III』　福島県教育委員会・福島県文化センター

註28　高木和夫・大越忠士他　1980　『母畑地区遺跡発掘調査報告V』　福島県教育委員会・福島県文化センター

註29　小井川和夫他　1982　「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書VI』　宮城県教育委員会

註30　目黒吉明他　1978　『母畑地区遺跡発掘調査報告II』　福島県教育委員会・福島県文化センター

日高努・山内幹夫他　1979　『母畑地区遺跡発掘調査報告III』　福島県教育委員会・福島県文化センター

日高努・大越道正他　1980　『母畑地区遺跡発掘調査報告V』　福島県教育委員会・福島県文化センター

註31　玉川一郎　1981　『舞台 ― 福島県天栄村における古墳時代集落跡の調査 ―』　福島県岩瀬郡天栄村教育委員会

註32　渡辺一雄他　1981　『朝日長者遺跡・夕日長者遺跡 ― 古代集落跡の調査 ―』　福島県・いわき市教育委員会

註33　柳沼賢治　1989　「福島県中通り地方の土師器」(註17文献所収)

註34　橋本博幸　1989　「福島県相双地方の土師器」(註17文献所収)

田中敏　1989　「福島県会津地方の土師器」(註17文献所収)

註35　註34田中報文に同じ

註36　松本保　1988　「古墳時代後期における群馬県北部の土器様相 ― 黒色土師器の検討から ―」『東国史論』第3号

なお、福島県明戸遺跡については下記文献がある。

辻秀人他　1984　『明戸遺跡発掘調査概報』　福島県立博物館調査報告第8集

註37　梁木誠也　1984　『聖山公園遺跡II ― 昭和58年度発掘調査概要 ―』　宇都宮市教育委員会

註38　川原由典・中山晋他　1981　『猿山遺跡　付　久部台古墳群』　栃木県教育委員会

註39　黒沢彰哉　1986　「茨城県中・南部における6・7世紀土師器の様相 ― 筑波町小田橋遺跡出土土器を中心として ―」『婆良岐考古』第8号

研究紀要　第8号

1991

平成3年10月28日　印　刷

平成3年11月1日　発　行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01　大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493—39—3955

印　刷　誠美堂印刷株式会社